

# クラス会および近況だより

## 平成19年の長崎地区26卒会は

中倉 敬昭 (昭26)

昨年(平18)のこの会では、会長の篠田君から「我々の高齢化は避けられないので、この会もストップを考える可きか」という提言がありました。「その時は、その時よ」とみんな無責任に散会したのですが、今年も3月21日に集まろうと連絡があったのです。篠田、立石、峰のご老体3君は変わらず元気で、よく世話をしてくれます。

平成19年3月21日は春分の日です。当日は幸い快晴でしたが、いつも全員揃って参加とは参りません。つまり後期高齢者の集いでありますから、この年齢になると、個人差はあってもそれ相当にガタがきているのは仕方ありません。参加したくても体調不良や、家族の不都合などでの不参加は已むを得ないのです。どこも何とも無いと云うバケモノ的存在は極めて少いと言う可きでしょう。

実は昨年と一昨年、足腰の不調で已む無く不参

加であった黒田君は、思い切ってオベに踏み切ったらしく、且熱心なりハビリもこれありで、なんと車の運転と囲碁も出来るまでに回復し、今回参加されたのは誠に喜ばしい事であります。

諏訪神社での今年の祝寿該当者は、傘寿の篠田英夫君と永江喜一郎君、そして喜寿の雪澤和夫君の3名です。永江、雪澤の両君は欠席でしたので、参加者の中からその代理をつとめた次第です。

その後は例によってセントヒル長崎で昼食、そして囲碁教室、夕刻から会食と凡そ同じパターン。

ところで私自身は昼食後、かつてその昔、諫早小野島のお寺の納骨堂の隣部屋に寝起きして、共に猛勉強?にはげんだ盟友の峰 唯信君が「絶好の天候だから、見たいところがあれば車で案内するが」と相も変わらず親切なので、遠慮することなく「完成して間もないと聞く、女神大橋を見てみたいが」と申し出ました。

という事で峰車に便乗、旭大橋を渡って左方向の飽の浦から、三菱長崎造船所の裏の山側を、ぐるっと廻り、広大な未完成の団地などを通過して女神大橋に到着しました。

造船所の周辺は、私が住む佐世保のSSKのそれに似ているものがあると感じながら、目的の女神大橋が近くなると、その巨大さと見事な景観に圧倒されました。が、貧乏性の私には情けないが、これは、物すごい金がかかっているぞよ、とその方向に頭がゆくの。橋を渡り左に折れ、好天で人が多かった水辺の森公園を見ながら通過し、セントヒルの玄関まで。

ともあれ一昨<sup>年</sup>が傘<sup>寿</sup>で、私より大部<sup>先</sup>にお生まれになった峰<sup>先</sup>先生の素晴らしいドライブは、昨今聞くとところの「後期高齢運転者適正検査」なるものは必要ありません。

囲碁教室では例の如く、貞方君と私が、本多、



平成19年3月21日 於 セントヒル長崎

峰 貞方 本多  
立石 篠田 中倉  
黒田



篠田、黒田の3君を相手に、夕刻の会食時間まで打ち続けたのですが、今回の3君は、体調などもあってもう一つさえなかったようであります。

会食では話しが弾み、佐世保に帰る私はJR長崎19:57発に乗りそこない、21:06発乗車でした。

さて、後期高齢者の集いであるこの会が、これから如何ようになるのか。その時は、その時、天命、運命でありましょう。

(平成19年9月12日記)

## エッセイ 3点

服部 俊明 (昭28)

### 私の宝物 19年10月1日

宝物は人により、時代により、年齢により、置かれた環境によって随時変化して行くものではなからうか。

**学生期** 私の幼年期の宝は遊び道具の独楽とペッタだった。よく回ったし良く勝ち取ったものである。

小学校の頃はクラス担任の古賀末春先生命だった。学級全員の心を掴み人望はピカ一だった。私の今日有るのは仰ぎ見るこの先生の薫陶によるものである。先生は誰押すと無く県の教職員組合の委員長になり、続いて若くして県会議員に押された。その後、さらに衆議院議員に当選されたが2年を待たずに急逝された。政治家としてはこれからと言う55歳の若さだった。心筋梗塞だった。先生の描かれた新しい社会構築の理想は実を結ばず、我が国にとっては大変な損失だったと思う。しかし教えを戴いた多くの生徒の心に今も尚彼の熟慮断行、至誠通天の信念は脈々と生き続けている。奇しくも学校は違っても彼の門下生は何故か共通している事は後で知った。優秀な先生は何処に転任されても益々偉いのである。語り草として大きな足跡を生徒の心に残されたものだ。

中学時代は科学少年となり電気に凝った。鉱石ラジオを組み立てたり、家の前の小川の流れを利用してスクリュウによる水力発電装置を試行錯誤しながら完成させた。実用には程遠かったが、小さな電球や小型のモーターを動かす代物にはなった。自分が出来ないもの、持たないものや正統から外れた異端に対する興味と、探究心は人一倍だった。生れ付きの先天的なものだと思う。

高校時代は乗馬とピアノにのめり込んだ。殆んど独学である。これは、家にあった音楽理論とピアノ教則本が頼りであった。高校の文化祭ではピアノ独奏にも出演したがいま思えば汗顔の至りである。でも「夢は満場のコンサートホールでピアノ演奏してみたい。」と、言ったら父親に、「馬鹿もやすみ休み言え」と窘められた。「もっとしっかりと大地に足を着けろ。」と。

大学時代は全学連闘争の奔りである。白い巨塔とまでは言えなくても、封建制度その儘の大学の民主化と自由自治の旗の下全国大会にも列車仕立てて参加した。

此のまま流れに乗って雷同していたら、勉強はともかく、留年放校の処分も免れない限界に立ち至っていた。そこを、カリスマの高取学部長に洗

悩まれた。また異常値の探求に情念を燃やしていた評議員のK教授の救援措置で、全学的な処分の対象からは紙一重で外れた。そんな事が有って学業と卒論の実験や実習にも専念したので、やっと卒業出来たのは幸運であった。

**家住期** 厳しい就職難のころ会社に入った。その内に家庭を持ち子供にも恵まれた。いわゆる家住期である。同期の連中は皆同じく青雲の志を持つ闘志ばかりだった。私も自分の仕事に命を掛けて戦い、その理想を達成する事に男のロマンを感じ粉骨砕身働いた。この時、今自分がこの社会を組み立てルールを敷き、動かしている事を肌で感じ取った。そして会社の内外にも多くの知己を得て、今でも交流が続くのは有り難い限りである。

**林住期** 定年退職後、再就職の為ビジネススクールに通って簿記、会計、財務、社労士、宅建、パソコンを学んだ。この知識と技能が退職前に備わっていたら別の人生が開けていたかも知れない。でも此の資格とキャリアは再就職の時役立った。某メーカーに破格の待遇で迎えられた。居心地は良かったし、辣腕を振るい、人脈は政財界、学会にも及んだ。10年余り勤めたが数年前に勇退した。離任式後、花束を貰って家族が待つ家に帰った。この間の私の宝は物ではなく伝統の継承と発展だった。

**遊行期** 現在は喜寿を迎えて遊行期を徘徊している。別の言い方をすれば敬老とは表向きで、生き恥を曝していると言うのが実態だろう。宝物はないが手本は世のため人の為に生き続ける聖路加の日野原重明先生である。でも現実には子供3人と孫3人にも恵まれた。彼らは夫々東京やその他で自立して居り、今更年寄りの出る幕でもあるまい。彼等に生きる権利を譲渡したのだから。楢山宜しくひっそりと消え去ることが自然の摂理であろう。

孔子は「七十にして心の欲する処に従って矩を超えず」と言ったが経験哲学から出た箴言だと思われるのである。

人生は多くを望まなければ何処にだって幸せはある。人間到るところ青山ありだ。新聞の訃報欄には〇〇さん△△歳だった。が、最近よく目に入る。思えば私には限られた時間は幾らも残っていない。

仏教では「色即是空」この世に宝物や遣りかけ

た仕事や執念を残さないことが天下泰平、極楽往生に繋がるので未練は残すなど説いている。私も全く同感である。死後の私の骨は荒浜沖にでも全部骨壺を浚って撒骨してくれたら大小、魚の餌となって自然循環の一部に組み込まれて永遠の命を得るだろう。海は幼児体験の原風景であり生命誕生の起源である。

だが、家族や社会や国家を考えた時未来への責任までも放棄する訳にはいかない。即ち、現在の社会の仕組みや環境問題では積み残された宿題は余りにも多すぎる。次世代に対する責任としての最大の課題は、日本が世界で唯一の被爆国である事だ。この故に、あれだけ大きな途轍もない原爆の犠牲の上に獲得した唯一の果実、いや結論としての憲法九条は日本が世界に誇る宝物である。この理想に近い憲法は国内的、国際的に見ても他国では到底成立する事は不可能であろう。

今こそ此の宝を全世界に広め核廃絶は勿論戦争自体を卒業する事こそ人類が生き延びる唯一の道だと訴えたい。此の為にはお互いに垣根を低くして、相互理解と信頼を基調とし「ちんどん屋精神」を導入の上「ほほえましい・環境整備」が焦眉の急だと思うのである。

## ユリイカ (Eureka) 9月30日

みずほ台地区から虹の丘小学校への通学路は山一つ越える急勾配の階段が延々と続くのだ。ここを毎日登下校する小学生は大変だろうと気に掛かっていた。

そんな秋日和、当校区民大運動会が開かれた。この世話係りの一人に成ったので、早起きして通学路の安全確保の為、中段まで降りて子供等を出迎えた。

「おはよう」「おはようございます」と声掛け合った傍にはコスモスが咲き誇っていた。握手を交わしながら子供の顔色や健康に注意し、たまには背中も押し上げた。

「どう此の階段！ 疲れないか？」

「いいえ、全然疲れません。きつくありません。」と快活な返事が返ってきた。その時ユリイカ！ 是だと思った。そうだ此のひ腸筋（別名こむら）は第二の心臓と呼ばれ静脈血を強力に心臓に押し戻すのだ。

大運動会の成績は此の山古志いや失礼。山越えの階段を利用する地区の子供等が優勝した。

常日頃此の階段の登り降りて鍛え上げた秘密の健脚が有ったのだ。当地区の御父兄は勿論、子供会皆さんの前向きな気力と団結力に満場の拍手が沸いた。

### 撒骨の歌（私の宝物） 9月9日

私はどういう訳か宝物を持たない。

林住後期に到り一応の社会的責任は果たした。3人の子宝も授かったが、他所で完全に独立しており孫3人も元気に育っている。

もう彼らに生きる権利を譲渡したから、年寄りの出る幕はない。静かに消え去るのみだ。

孔子は七十にして心の欲する処に従って矩を越

えずと言ったが悟りの箴言だと思う。人生は多くを望まなければ何処にだって幸せはある。人間到る所青山ありだ。

仏教では「色即是空」この世に宝物や未練を残さない事が天下泰平、極楽往生に繋がると説いている。その意味からも宝は無用の長物。私の死後は骨壺を荒浜沖で撒骨浚って呉れたら大小、魚の餌となって自然循環の一部に組み込まれて永遠の命を得るだろう。

だが残された家族や社会や国家を考えた時未来に対する責任は残る。途轍もない犠牲の上に獲得した唯一の果実である憲法九条は日本の宝。今こそこの宝を世界に押し広める事が人類が生き延びる唯一の道だと訴えたい。

## 三朋会 だより

小島 弘・副島 英夫（昭30）

昭和30年大卒3回生は、昭和55年第4回クラス会の時、会の名称を“三朋会”と命名して、今回は第20回の三朋会を関門地区で開催した。10月17日(水)下関市みもすそ川町下関市営国民宿舎「海峡ビューしものせき」に参集して午後6時30分開宴した。宴に先立ち幹事小島は、クラスメート42名中すでに物故した10名の名前を呼び上げ、全員で

黙禱を捧げた。当地名物“ふく料理”を食しながら1年ぶりの旧交を温め、お開きになって後も一室に集まって二次会の話柄が尽きなかった。

宿舎の場所は関門橋を間近に望み、早鞆の瀬戸を眼下に見下ろす風景絶佳のところであり、翌朝、日の出の景色は素晴らしかった。早鞆の瀬戸の下関側は壇の浦である。昔、源平最後の合戦がこの



三朋会 平成19年10月17日 於 海峡ビューしものせき

狭い海域で行われた故事がしのばれた。

二日目、10月18日(木)、9時30分貸し切りバスで宿舎を出発し、まず、下関の台所といわれる唐戸市場へ。もう専門業者同士の商いは終わっていて、われわれを含めて観光客達が店を廻っていた。バスは北へ1時間、豊北町角島大橋のたもと「西長門リゾート」で昼食。昼食後、2000年に竣工したという角島大橋を通過して角島に渡った。日本海響灘のど真ん中、真っ青な海と秋の潮風と灯台の島、特産品販売所「しおかぜの里角島」で一休み。バスガイドさんによると2005年の市町村合併によって、この豊北町までが下関市になって、人口は山口県一になったそうである。帰路1時間、市中心に戻り今度は「海峡ゆめタワー」の30階に登って海峡、対岸、市内を眺望した。日も傾いたころ、日清講和記念館へ到着、続いてほとんど隣接する赤間神宮へ歩いた。サンデン旅行社の担当者に後で聞いたところによると、われわれのバスに乗務された年配のガイドさんは、同社のガイド教育係

であったそうで、実に博識、名調子、安徳天皇を祭った赤間神宮の由来も詳しく聞いた。4時すぎ帰着、風呂など入ってから開宴、二次会とこの夜も更けた。

三日目、10月19日(金)、9時30分ジャンボタクシー2台に分乗して宿舎を出発、中国自動車道壇の浦パーキングエリアから景色を眺めて後、関門橋を渡って門司港駅に到着、北九州市ボランティアガイド山根さんの案内によって門司港レトロ地区を見学した。門司港ホテルで昼食、次回開催地関東地区幹事黒岩君の挨拶を受けてから散会した。

参加者は次の通り(17名 敬称略)

山戸 寿、江口 嶷、馬詰 久子、  
川上 万里、黒岩 幸雄、黒岩 夫人、  
小島 弘、近藤 嘉和、宮崎タツ子、  
副島 英夫、副島 夫人、酒井 裕子、  
田中 熙子、郷野美智子、峯 京子、  
峯 武麿、森田 和之

## 昭和32年卒50周年記念同窓会

小林 浩(昭32)

はや50年とは長旅なれど若き頃はつい先日と、元気を振って長崎に集いました。

今回は、たまたま長崎大学中部講堂で卒後教育

講演が開催されると聞き及び、同窓会開始前に少しでも薫陶を得ようと向学の士と若い学生さんに混じり勉学の時間を取りました。小林龍二先生の



平成19年10月20日 於 花月



がん細胞に関わる「プロテオミクスの新展開」と、はるばるアメリカからお帰りになられた下村 脩先生の「クラゲ中の二種類のタンパク質イクリオンと緑色蛍光蛋白質 (GFT) の発見とその生命科学への貢献」を聴講いたしました。内容が高度過ぎて。ウンウン理解できたかなー？

小林先生のお話は、がん細胞と血管増殖に関わる蛋白質のお話で、これを裏返せば薬が出来るかな？程度。下村先生は、「学問の真髄に達するには、こつこつと追い詰めて、執念を燃やし、何故何故を問い詰めた時、初めて神から与えられるものでは」とその凄さを十数年続けられた研究の姿で淡々と語られたことでした。その後の生理学、薬剤のCa作用薬の発展に大きな貢献の源流となっています。

4時半過ぎ、JR九州ホテル長崎に三三五五と集まり、毎年お元気に参加して戴く一番ヶ瀬先生、今回はご夫妻で参加されました。今年の会場は待望の「花月」、同窓会報第46号にも紹介された今泉先輩(昭31)に幹事の長田さんからお願いして無事会場を確保し開催が実現しました。今泉先輩に感謝、感謝。

「花月」の表の入り口しか知らない小生、お庭の広いのに驚き。今年の参加者は例年より一寸少なく、一番ヶ瀬先生ご夫妻を入れて総勢19名となりました。悲しいことに今年の悲報は榮田和子さんが交通事故、なんともムゴイものですね。いつも同窓会に参加され、にこやかに静かで、皆の話を良く聞かれている姿が印象的な方でした。(合掌)

同窓会でこの年齢の会は、お互いの元気を確認、病気、故障の数を自慢、どんなに乗り越えて来たのか秘伝の伝授等々毎回賑やかには事欠きません。働き組も精々アルバイト程度、長崎の幹事役の本



多君はボツボツ退役とか言ってたのに、突如現役復帰、頼られる方もコレ大変、体の故障なんぞ言う暇も無いほどの激務、仕事で元気を貰ってるみたい。何はともあれ、92歳のお誕生日を迎えられ、なお壮健な一番ヶ瀬先生には脱帽、この年齢でヒーヒー言う訳には参りますまい。と宴会も豪華な料理が次々に運ばれ、綺麗姉組さん3人の登場で盛り上がり、あの「ぶらぶら節」を聞かせて貰い、無芸な輩の踊り指導を受け舞台は大賑わいで幕となりました。

翌日は紺碧の秋晴れ、タクシーに分乗し女神大橋見物、橋の中端まで徒歩で散策、心地よい海風に吹かれながら見る長崎港の入り口、香焼島と三菱造船ドック、片方稲佐山・立山と長崎市街の実に綺麗な展望でした。記念写真を撮り、その後、南山手から東山手のオランダ坂を籠ならぬタクシーで巡って浜の町「吉宗」で昼食、相変わらずの大井、もう平らげるには一寸無理な年になりました。満腹の内に次回をどうするか、皆元気の内もうここで終回とも思いましたが、来年もとの意見に、では、来年は九重山でと決まりました。中西君にお世話頂くようです。よろしく願いいたします。

なお、熱心な方たちは長崎歴史博物館に勉強に行かれた様ですが、見所たっぷりの資料が展示されている様で今一つの長崎勉強重点先の様です。私は本屋で見かけた長崎日日の「長崎昭和レトロ写真館」を買って帰りました。昔日の自分が歩いた、何処からも港が見える長崎がありました。出席者：一番ヶ瀬先生ご夫妻、飯島、井本、小川、河田、小林、工藤、後藤、白石・白石、陣内、嵩下、中西、波多野、細田、本多、長田、山田

## 京都参楽会だより — 大阪・京都・宇治 —

西脇金一郎 (昭33)

期日 平成19年6月9日～12日

今年の長葉同窓会総会が大阪で開催するという  
ことで、近在の高田・高守両氏に今回の参楽会幹  
事をお願い、京都参楽会が企画されました。

平成19年6月9日(土)、午後5時から行われた長



葉同窓会総会は  
120名もの同窓  
生が参集してい  
ましたが、特徴  
的だったことは  
私たち昭和33年  
卒出席者10名の

ように他にも30～40年代の4～5グループがクラス  
会形式で参加していたことです。最も多いクラス  
では15名が参加し、殆どのクラスが翌日は京都  
周辺の観光・宿泊ということでした。

翌10日、参楽会  
メンバーは午前9  
時に新幹線京都駅  
中央口付近に集合。  
新たなメンバー6  
名(飯島、池田、  
佐々木、千原、仲



尾次、松浦)が加わり、総勢16名で、貸し切りバ  
スで大原三千院へ向かいました。バスは加茂川・  
高野川を上り10時に到着。高田氏の先導(ガイ  
ド?)で約1時間三千院内の諸物を見、写経をし、  
11時30分に大原を発ち、昼食処、貴船の「右源太」  
にて床下に小川が流れる涼風の中で川床料理を楽  
しました。聞くところによると「川床料理」の  
「川床」の読み方は貴船では「かわどこ」という  
ようですが、京都の加茂川沿いでは「かわゆか」と  
いうそうです。いずれにしてもまさに風流を愛す  
日本人好みの風情でした。食後は駐車場までの  
道中、貴船神社にて参拝した後、牛若丸が天狗と  
剣術修業した鞍馬寺に立ち寄り、一路、宇治へ向  
かいました。最初に訪問した先は源氏物語ゆかり

の宇治にある『源氏  
物語ミュージアム』  
で、映画「浮舟」の  
最終回16時30分に滑  
り込み、20分間、幽  
玄の世界を鑑賞し、  
館内を見学しました。



午後5時過ぎ、宇治川対岸のほとりにある宿泊場  
所「花やしき浮舟」に一行は無事到着しました。  
午後7時より、旅館直行の大城氏を交え総員17名  
による京都参楽会懇親会が始まりました。高田氏  
の計らいで今回は全員椅子席で皆から喜ばれまし  
たが、お互い老いのせいを確認しあっていました。

食後、多忙な大城氏は京都へ発ちましたが、例  
のごとく男性軍部屋にて2次会に花を咲かせ、23  
時に解散、就寝。翌11日は朝食後、すぐ近くの平  
等院鳳凰堂を拝観しました。普段、なかなか宇治  
まで足を伸ばせない私たちですが、950年前に建立  
された平等院の風格には圧倒され、来てよかった



と感動しました。  
その後は電車で京  
都駅まで行き、来  
年の卒後50周年記  
念参楽会で再会を  
約束し、解散しま  
した。

今回の参楽会は消息確認36名中、17名、内男性  
5名、女性11名と圧倒的に女性軍が優勢でしたが、  
来年の50周年参楽会には男性軍も奮起して参加し  
て欲しいと思いました。

最後に、短期間にもかかわらず緻密なそして有  
意義なスケジュールを組んでいただいた高田・高  
守両氏に対し心からお礼を申し上げます。又、別  
紙の通り、会計報告もまとめて頂き有難うござい  
ました。皆さんとも来年6月には長崎でお互いに  
元気な姿でお会いしましょう。



2007年6月10日 於 花やしき浮舟

## 下村 脩先生(昭26)の朝日賞贈呈式

富安 一夫 (昭34)

昭和26年卒の下村 脩さんが2006年度朝日賞を受賞され、平成19年1月29日に東京で贈呈式が行われました。先生は卒業後、フルブライト留学生として渡米され、米プリンストン大研究員、名古屋大学助教授などを経て、82年から米ウッズホール海洋研究所上席研究員となられ研究を続けられました。

研究の中で「オワンクラゲに含まれる緑色蛍光タンパク質 GFP の発見と生命科学への貢献」が評価され今回の受賞につながったものです。遺伝

子研究の進歩でたんぱく質に印を付ける道具として応用され、現在では生命科学その他の分野の発展に世界的に大きく寄与しています。先生は受賞の挨拶のなかで蛍光物質の抽出と結晶化には成功したが、自分では用途が分からず他の研究者のおかげで有名になったとおっしゃっていました。また挨拶の途中で会場を暗くして発見したたんぱく質 GFP の美しく発光した蛍光をみせて皆を驚かせておられました。

贈呈式は朝日賞の他、大佛次郎賞、大佛次郎論



談賞と3部門合同で行われたため、各分野の方が大勢つめかけ盛大でした。下村先生は明美夫人とともに出席されていましたが、長薬の関係では河野信助名誉教授夫妻、明美夫人と長薬同期の松尾幸子さん、田中良子さん、上野美智子さん、安西

美恵子さん、それに同窓会の会長代理として富安が参加し合計7名でした。先生は米マサチューセッツ州の自宅に研究所を作り、現在も研究を続けられているそうです。

## 長薬昭35卒同期会

渡辺 治 (昭35)

卒業後47年、1年半ぶりの同期会が、河津桜の身頃に合わせて、2月27・28日に、伊豆の伊東市で開催されました。交通が不便な地にもかかわらず、16名と多数が集まりました。

幹事の西山由美子さんの挨拶、田川君の乾杯の音頭で宴会が始まりました。宴たけなわになり、木下君と荒川さんの先導で校歌斉唱と一寸畏まり、続いて全員の一言挨拶では、入社当時の逸話披露から、最近の仕事、趣味や闘病の話に至るまで、学生時代と同じ口調も懐しく、各々雄弁に話ってくれました。

次に、宴会場階下のサロン風カラオケルームでの二次会には全員が参加し、初めは静かな独唱から、その後誰歌うことなく学生時代に流行った曲が次々と流れ、マイクそっちのけの大合唱になったり、あの頃の思い出話に夢中になったり、夫々の思い出の曲を口ずさみながら夜は更け、最後に、荒川さんが叙情歌“初恋”を美声で歌い上げ、締めは、西山さん指導の“ボンダンス”と一同環になって踊り、11時過ぎにやっとお開きとなりました。

さて、次の日は参加者13名で、ガイド付きサロ



平成19年2月27日 於 ホテル暖香園  
西山 藤岡 山本 井上 渡辺  
木下 田川 北島 中尾 足立  
元永 小川 福田 荒川 渡邊 草野

ンバスによる伊豆の名所廻りを楽しみました。観光の本命、河津桜は、本会の開催をその身頃に合わせた甲斐あって、満開の桜並木を歩くことができました。薄紅色の花は実に艶やかで、染井吉野とはひと味異なる春を感じさせてくれました。他の観光地も、断崖絶壁の城ヶ崎海岸、彩り美しい吊り籠の稲取、そして伊豆の踊り子で有名な天城トンネルを歩いて通り抜け、好天の下、ウォーキ

ングも堪能した1日でした。観光を無事に終了して、修善寺駅で解散となりました。

最後に、この2日間すべての手配とキメ細かい気配りをして下さった幹事の西山さんに、深く感謝致します。

なお、卒後50周年記念の同期会を平成22年、雲仙で開催の予定です。盛会を期待しています。

## 平成19年度長薬同窓会と昭和36卒ミニクラス会

浅井 武 (昭36)

平成19年6月9日(土)、長薬同窓会総会(全体)と近畿支部総会が大阪駅に隣接したホテルグランヴィア大阪で開催された。出席総数117名(近畿支部の出席者は50名)で盛会でした。総会は順調に進行し、懇親会は12テーブルでそれぞれ大いに賑わい、進行役の声も聞こえ難いほどでした。

総会への昭36卒の出席者数が14名で出席者総数117名の約12%になったのは、開催地の近畿支部副支部長である私のために、総会を盛会にすべく近畿在住の黒田君の旗振りで、味田さんや佐々木さ

んなら3人で手分けして、昭36卒の皆さんへ総会への出席を2月から呼びかけて頂いたことと、それに応えて遠方から出席して頂いた皆さんのご協力のお蔭でした。日頃は支部の運営の役に立っていない私としては、同期の方の出席者が多く、少しでも総会の盛り上げに協力できたかな!と喜んでいます。

総会・懇親会の後、昭36卒14名は1階下のラウンジで喫茶しながらのミニクラス会を開き、その席で次の日の京都観光について京都在住の味田さ



2007年6月9日 於 ホテルグランヴィア大阪  
黒田 白松 武田 佐々木 穴井 栗屋 味田 浅井 伊藤 有吉 岩切 園田 自見 林田



2007年6月10日 於 京都, 金閣寺  
園田 味田 武田 伊藤 齊藤 栗屋 自見 林田 黒田  
白松 穴井 浅井 佐々木 酒井 橋口

んから、何度も下見を重ねて立案したコース内容  
と時間について概要の説明がありました。

翌朝は、大阪駅9時15分発の新快速で10人が京  
都駅へ行き、直接京都駅に来た5人と合流し全員  
揃ったところで、貸切観光バスで金閣寺、大徳寺、  
天龍寺を廻りました。観光客の多い時期でしたが、  
ガイドさんと連携した味田さんの段取り良い案内  
で、一人の迷子も出さず予定コースをほぼ予定時  
間どおりに廻りました。ほんの一時雨が降りまし  
たが、後半は晴れて暑いほどでした。鉄鉢精進料  
理（大徳寺）を味わい、金色輝く金閣寺や6月の  
緑美しい庭園の楓と竹林およびきれいな空気を満  
喫し、久し振りの再会の喜びを噛み締めながら、  
皆さんはそれぞれ飛行機や新幹線で帰路につかれ  
ました。なお、京都観光は、前日の総会出席14名  
のうち女性2名が不参加でしたが、男性3名が10  
日の朝、京都駅から参加したので、女性9名・男  
性6名の15名でした。

今回のミニクラス会では、卒業以来の再会をし  
た方もあり、お互いそれなりに経年変化しており、  
顔を合わせた時は「誰だったかな？」と直ぐには

思い出せない人もあったようでした。また、70歳  
近くになり健康面でもいろいろな辛い体験をされ  
た方が多いようでした。そこで、今後の人生何が  
起きるか分からないので、なるべく毎年ミニクラ  
ス会を開いてはどうかということで、来年の長崎  
での同窓会総会の時にも、ミニクラス会を開こう  
という提案がありました。

なお、今回のミニクラス会の準備に当たって近  
畿在住の4人は、2月から5月初めの間に4回会  
合を持ち、皆さんへの連絡内容と出欠確認方法や  
ホテル手配や京都観光の内容などについて会食し  
ながら相談しました。

皆さんへの詳細な連絡文書は、Eメールで送信  
(浅井担当)しましたが、メールアドレスがない  
方々へは、FAXや封書での連絡(味田さん、佐々  
木さん、黒田君3人で分担)となりました。

京都観光担当の味田さん、ホテル手配の佐々木  
さん、重いカメラを持ち歩いて沢山撮影して想い  
出を映像にしてくれた黒田君には、心から感謝し  
ています。

## 卒業45周年同期会

吉田 研次 (昭37)

2002年に昭和37年卒の40周年同期会が長崎の中華街「京華園」で開催された時、今後、同期会は毎年各地持ち回りで開催するようになった。昨年までの開催地は、博多中洲(福岡)、奈良、指宿(鹿児島)、鬼怒川温泉(栃木)と開催されてきた。

今年は卒業45年の節目の年になる事から、長崎で開催する事になった。長崎在住者(幹事・世話人野村 修・松田芳郎さん)が同期会の日時と場所について数回打合せを行い、10月28日(日)料亭「松亭」での開催と当日の午後に「長崎さるく」コースを散策する事にした。

昨年「長崎さるく博」は、4～10月の半年間開催され、長崎の魅力的な観光名所や旧跡を数多く「さるくコース」が計画・実施された。長崎市内の人達はもとより、全国各地から多数の観光客の参加があり、大変好評であった。

今年の「長崎さるく」は、昨年より規模は縮小されたので出発時間と所要時間を勘案して「文人墨客も思案した?一丸山巡遊」コースを選択した。

丸山花街は、ご存知の通りかつて江戸の吉原、

京都の島原と並ぶ、日本三大花街の一つであった。

当日、「長崎さるく」の希望有志者14名が出島の和蘭館に午後2時に集合し、名人ガイド(試験に合格した人)の案内で丸山・銅座界隈をぶらぶらと散策に出発した。

昼間は殆ど人通りの少ない銅座歓楽街の路地を通り抜け、丸山入り口にある「見返り柳」と「思い切り橋」に出た。花街からの帰り道、遊女への未練がここで振り返らせ、そして未練を断ち切らせたのでこう呼ばれたと言われている。

学生時代、銅座・丸山界隈で酒を飲む時は、学生服(学生服しか持っていなかった)を着てよく飲み歩いた事を思い出した。

丸山公園から長崎の代表的な民謡「ぶらぶら節」の歌詞にある史跡料亭「花月」、芸者の愛八さんが所属していたとされる長崎検番(現在、17名の芸者の名前が書かれた提灯が下がっていた)前を通り、「梅園身代わり天満宮」及び「中の茶屋」へとガイドさんの詳細な説明を聞きながら狭い路地、古い石畳をぶらぶらとさるいた。

梅園天満宮の境内にボケ封じの「撫で牛」の像



平成19年10月28日 於 松亭

が鎮座してあり、その牛の頭を撫でてボケないように願掛けしたので、暫くは認知症にはならないだろう。

「中の茶屋」を探索した後、丸山オランダ坂を下り、昔殿方が丸山遊郭に「行こか、戻ろか」と思案した、また歌で有名な「思案橋」に着いた。約2時間の丸山巡遊の行程はそこで終わった。

銅座・丸山界限は、夜のとばりがおきる頃、酔客で賑わうところだが、今日は昼間の明るいうちに散策し、昔の名残のある新たな風情を垣間見ることが出来た。

宴会は、その思案橋の近くの料亭「料亭」で開催された。今回も遠くは関東地区から中西洋吾・原田和朗さん、沖縄から喜納玲子さんと各地から19名（男性14名、女性5名）が参集した。

まずはじめに女将から「おひれをどうぞ」と挨拶があった後、原田和朗さんの乾杯の発声で宴は始まった。池田修一さんから鹿児島島の香りの良いおいしい焼酎の差し入れがあり、水割り、お湯割

で杯を交わすうち、酔いが徐々にまわり、座の雰囲気も賑やかになってきた。

そこで恒例の各人の近況報告が行われた。大学を卒業して45年（年齢68歳から70歳？）、この年齢になると自分の健康状態の話、自分の健康維持のためスポーツジムに通っている話などどうしても健康への注意の意識の話が多くなされた。

その後も時間が経つのも忘れる程歓談が続き、料亭の「お汁粉」が出て、一次会は盛大なうちに終わりました。

二次会は、昼間巡遊した「見返り柳」、「思い切り橋」の近くにあるカラオケが歌える店「母垂」に席を移した。そこで懐かしい昔の歌、比較的新しい歌及び長崎の歌など各人得意な持ち歌が熱唱された。

こうして卒業45周年同期会の楽しい一夜は、終わりました。来年は、大分で再会しましょう。それまで皆様お元気で。

## 宮崎博孝君の死を悼む

岡 邦彦（昭38）



9月16日夕方、天草からの電話だった。受話器の向こうで宮崎博孝君の奥さんの声が聞こえている「今朝、主人が亡くなりました」私は一瞬言葉を出せなかった。その時どんな受け答えをしたのかあまりはっきりしない。

お悔やみの言葉も明瞭に言えなかった様な気がする。

宮崎君は前の奥さんを病気で亡くされ、4年ほど前、若くて美人の今の奥さんと再婚されたばかりで、2004年奈良での同級会で再婚しました、と嬉しそうに報告され同級生一同から拍手の嵐で迎えられていた。人生はまだまだこれからなのに真に残念でならない。

翌17日告別式に参列のため、朝早めに高橋 晃

君と出かける。甲間に訪れた人々の多さに内心驚いて高橋君も感じいていた。故人の人望、人となりが見えるような気がする。祭壇の遺影は晩年の温厚で柔和な顔写真で、眺めていると昨日の事のように学生時代の思い出が頭をよぎる。

薬学部入学は昭和34年4月、この年4月は現天皇がご成婚された年で日本全国馬車行列をテレビで見っていた。私もその中の一人で街なかで見っていた。僕らの年代の学生生活の思い出は常に此处から始まる。1学年40名、顔も名前も知らない時期である。歓迎会、クラスのコンパ、近隣の山々（岩屋山、風頭、稲佐山）へハイキング。後に雲仙仁田峠へも、それに学園祭などでクラス全員の親交を深めていった。その内、日曜祭日になると宮崎君の下宿先へ遊びに行くようになる。彼は人当たりがよく、世話やきでクラスの友達も女性を含めて多数いた。こうして思い出に耽ると若い頃の宮崎君が話している様子が目の前に浮かんでくる。

九薬連（九大薬、熊大薬、長大薬後で福大薬が参加）主催のスポーツ大会が毎年各校持ち回りで行われていた。私と宮崎君は卓球部に所属し九大、熊大へ遠征したものである。他に部員としては山本君、久保さん、小隈さん等がいた。山本、久保、小隈の3方は各1勝が見込めたが、我々2人は未知数であった。熊本大会では試合後飲みに行き終電の時間が過ぎ水道橋あたりを2人で線路伝いに2時間ほど歩いて帰るなどしている。長崎でも浜の町から昭和町まで線路沿いに宮崎君を含め数人で歩くなど今では考えられない若くて元気な時もあった。

昭和38年4月卒業、宮崎君はシオノギ製薬へ入社され数年後退社し郷里の天草で調剤薬局を開局する。この時はまだ医薬分業の必要性が論じられるばかりの未開拓の分野で院外処方箋発行枚数も少なく勇気のいる決断だったと思う。熊本地方で調剤薬局を始めたのは宮崎君が最初ということで、新聞に報道された。この事は本人も自慢で新聞の切抜きを友人達に見せて回ったようです。その後、開局薬剤師会の役員を務め2005年9月九州山口薬学大会（長崎）の開局部会で表彰された。ロータリークラブに入り地域社会へ貢献するなど勉強家で努力の人であった。

「今度、九山薬学会で表彰されるバイ」「ホウ、それはスゴイ」ということで、お互い奥さん、家人同伴4人長崎市内の銀鍋で酒を酌み交わし宮崎

君の長年の労をねぎらった。この時韓国旅行の約束をしたが、年明けて1月体調を崩して旅行出来ないとの手紙が来た。未だこの時点では彼が「がん」に侵されているとは知らなかった。熊大附属病院耳鼻咽喉科へ入院の知らせで、寒い日が続く早春お見舞いに行く。顎下のリンパ腺が大きく腫れ、話しにくそうであり長居もならず「今は良い薬も有り、治療法も進歩しているからすぐ退院出来るバイ」と気休めにもならない事を言って帰る。薬の副作用で頭髪がまばらになり痛々しい。元気に歩かれエレベーターホールまで見送りに来てくれた、これが最後の姿になった（2006年3月）。この後退院されている。

旅行が趣味で忙しい仕事の合間に時々外国に出かけていたようで、亡くなる前年2006年11月イタリアへ友人と旅行している。調剤薬局の仕事もこなすほど一時は健康回復していたが、明けて1月体調を崩し再度入院……そして9月……

やはりだめだったのか、「がん」には勝てなかった。人体の仕組みからいえば体内に「がん」が芽生えるのは人の宿命なのかもしれない。平均寿命が男女世界一とあったところでなんのたしにもならないと思った。

クラス一同に代わり

ここに心から宮崎博孝君の

ご冥福を祈る

## 卒後42年の日常

松村 祐子（昭40）

2年前の平成17年8月に、岐阜で同窓会があり、長良川の鶺鴒いと花火大会を見た。岐阜市にお住まいの川越さんと山縣さんが、お正月の頃から旅館を押えて準備して下さったそうだ。6畳と8畳位に女子10人が枕を並べて寝た。男子は6人が隣の部屋で。全員よっぽど近況報告やら、いろいろ話が弾んだ。翌日は岐阜城に登って、帰りに違う道を下った私を、手分けして探してくれたり、誰かのお寺に寄ったり、とても楽しかった。

ちょうど白川郷が世界遺産に登録された年で、

帰りに三女夫婦がそこへ連れて行ってくれた。白川郷にはどういういわれか、木像のマリア観音の神社があって、三女が赤ちゃんができたようだというので、懸命にお願いしたのだったが…。来年か再来年は、「瀬戸内海の島でふぐを。」ということになっている。同窓会の報告はまだできないので、私の近況をお知らせしようと思う。

現在、農薬・資材・動物薬の卸に勤めている。倉庫の温度管理、薬品の品質の維持管理等々。それに付随して倉庫の清掃、整理整頓、入荷の受け

取り、出荷の用意と発送・伝票の整理などもやっているが営業と配達はしない。農薬の説明をしたくとも、その植物のどの時期に、何をどれだけ撒くやらわからない。10年も居れば、何に使うかはおぼろげにわかる。まあ、さくらんぼやらりんごやら絵もついている。会社には（私より）若い人ばかり。何を話すにも説明しないと通じない。学校保健会に出れば、よく嫉られてない親達。母子お揃いで髪を染めるのをやめるように指導してくれとか。児童がことをおこすと校長は、「生命の尊さ」を全校生徒に説く。「もっと自分自身を大切に」と私は言いたい。エイズ撲滅や麻薬覚せい剤乱用防止など、叫んでみても、危機感は全く伝わっていかない。

孫はまだ2人。玄関を開けると、チョココンと座っていてニッと笑う。座敷わらしかとどきんとする。7つまで数えると、「ばあちゃん、ちゅごい!!」とほめる。べとべとの手で髪をなでて、「かわいい」と抱きつく。「機関車トーマス」を私も必ず観ていた。

今「佐伯泰英」にはまっている。「密命」「いねむりいわね」「吉原影同心」など殆んど読んでいる。時代小説で用心しないといけないのは、登場人物に史実と異なることがあるということ。「いわね」の時代の将軍は家治で聡明な若様（次期将軍）は家基という。実際は、嫡子はなくて、家斉が養子に入る。前に「ハーレクイン」を古本屋に出した時、「奥さんは現実と虚構が区別できないでしょう。」と言われた。（その本屋は、つぶれてもうない）時代小説を読んでいて、そうだろうなとうなずけることも沢山ある。参勤交代は現代のゴールデンウィークの比でなかった。渋滞、宿屋のとり

合い、道中のトイレ……。小説を読んで、現存する町並と、変わってしまった町とを比較して歩き回るのはとても楽しい。長女が東京の場末に住んでいるので、暇を見つけては古い江戸の名残りを探す。前に雇用保険をもらっていた時、諫早中を歩いて回った。終点までバスで行ったりした。が山の中は怖い。4時を過ぎると急に日が落ちて、道を尋ねようにもかかしだったり、いらくさに触って、半身やけど状になったり。農家が働いている横をのんびり歩いているのは、悪いことをしているようにも感じる。鬼平犯科帳を読み上げてから、鬼平が急死し、次の火付盗賊改方長官に代った小説を読んだ。やはり危ぐした通りの状況になっていた。平蔵が急死した後、手下の与力、同心は「時服下げ渡し」のみで解雇。盗賊だった手先は、ちくった相手の仕返しを恐れて暮らしたという。状況の変化に備えておかないといけないのは、今も昔も同じようだ。大体主人公が幸せになる話を探して読んでいます。

研修会は時々行く。『有機化学 分子が分子を見分ける―基礎と応用―』久しぶりに勉強したような気がした。先輩の先生も同じ気持だったらしく、「久しぶりに学生に戻った気分」とお礼を述べられた。今一度何かを合成したいと、時々思う。「多彩な分野で活躍する女性薬剤師」という、中央でも活躍されてる方の講演を聞いた。いつも失礼とは思うのだが、聴衆が少ないのではないかと心配で聞きに行くのだが、とても盛会で、子育ての合間に実益と生きがいで薬剤師の免許を生かして過ごしてきた私には、別の世界のお話と息をのんだ。

次の会報には、時が合えば、瀬戸内海の島でふぐを食べて盛り上げる私達を報告できると思います。

## 41年卒クラス会だより

平山 文俊（昭41）

昨年日光で開催したクラス会で、同級の伊豫屋君が同窓会長に就任して初めての同窓会総会が平成19年に大阪で開催されることから、多くの同級生が総会に出席するように総会に合わせてクラス会を大阪で開催することとなり、大阪在住の安田

君にお世話をお願いし、今年は関西地区でクラス会を開催しました。総会には18人のメンバーが参加することができ、卒業以来はじめて、先輩・後輩と会えた人もおり総会を盛り上げる効果はあったと思います。



その後、クラス会のスケジュールに移行し、二次会で談笑、全員三井アーバンホテルに宿泊して一日目は終わりました。

二日目は、貸切バスで、総勢18名が紀三井寺を参拝、近くの食事所で昼食、原田さんのハーモニカ演奏で合唱しながら狭い急峻な坂をバスに揺られ、午後3時過ぎに高野山・奥の院に到着、歴史上の人物のお墓と杉の大木に歴史と荘厳な雰囲気、一方で犬のお墓に現代を感じ、宿坊に入りました。宿坊での食事は精進料理、お坊さんが給仕をされますので、いつもの宴会とは勝手が違い、ビールを少々飲んで座を崩すことなく飲食し、早崎君の尺八を傾聴するなどして、真面目な時間を過ごしました。

三日目は、心配していた天気は快晴、空気は冷たく澄みわたる絶好の気候、朝のお勤めに参加し、ローソクの光が金の仏具に反射する静寂の中で、お坊様がお経を上げられる、節目節目には鳥の鳴き声が聞こえる不思議な雰囲気の中で参拝しました。お坊様に給仕をしてもらう朝食、みやげもの店などが連なる街を散策後、宿坊を出発し、金剛峰寺・宝物館を駆け足で巡り、印刷物で見たことがある仏像などの展示物を拝観、身も心もリフレッシュして山を下りました。

途中、戦国時代に鉄砲で名をなした根来寺を見学し、白浜でお魚の昼食を摂り、新大阪駅で来年の壱岐での再会を約し散会しました。

## 昭和44年卒同窓会淡路島に集う

富永 義則（昭44）

今回のよんよん同窓会（昭44年長業卒）は、長業同窓会総会開催と合わせて企画された。今回の幹事は長業同窓会近畿支部の副支部長を務める広本さん、何とか総会参加者を100人以上にしたいとの希望に賛同するという形で大阪での同窓会総会に参加し、クラスのよんよん同窓会を翌日淡路島の洲本でということになった。

近年のよんよん同窓会は年一回、昨年は佐賀の

嬉野市で、その時の参加者が20人、久し振りの20人の大台参加者となり、楽しい会になったのがほんの昨日のようだ。この時、今回のお大坂での同窓会が決められた。6月9日の長業総会は昨年からの早い時期から決められていたことと、広本さんからの案内もあり、いつものように互いの連絡も頻繁に行なわれたようで予想外の14名の参加で、いつもと同じ規模の同窓会になった。例年と違うのは

長崎出発の時から、総会参加者の木下先生（昭35）、3年先輩の伊豫屋同窓会長（昭41）、1年先輩の山中長崎支部長（昭43）と、それに数人の先輩方と一緒にになったこと。長崎から同行するのは中村、内田、それに藤田のいつもの面々だ。同窓会総会の参加者も100人を越えているとの、会長の話から何となく和やかな雰囲気です長崎を出発できた。

大阪駅の周りはこれまでとは大分様子が異なり、高層ビルに囲まれ何処に行くべきホテルがあるか検討がつかない。迷い子になった気分。バスを降りた所の地図を見てもスッキリしない。駐車場の管理人さんに聞いて、何となく理解し、その方向に歩いて目印となる中央郵便局が見つかり近くまで来ていることがわかる。しかし高層ビルの谷間、宿泊するハートンホテルの文字を見るまでは少々不安、こんな状況での大阪着となった。ハートンホテルに着くと、しばらくして藤井さん、松村、原（赤堀）、比嘉（島袋）、小坂さん、それに品川が集まってきた。ここで遅めの昼食をとり、一旦それぞれの部屋に戻った後、4時半頃同窓会総会会場のホテルグランピア大阪に向かった。そこで予定の荒木さん、西村、星野、それに幹事の広本さんにも会えた。会場前の受付のところには多くの先輩、後輩たちがいる。それぞれ知合いと談笑し5時の総会開催まで待つ事になる。

我々よんよんクラス会の面々も同窓会総会に参加するのは初めての人がほとんど、会は時間通りに始まり途中原さんが入ってくる。それぞれ前の方と後方に分かれての総会参加となる。会は白石近畿支部長（昭32）の挨拶から始まり、伊豫屋同窓会長の挨拶、物故者への黙禱、議長選出と続き、会計報告等の議題等を経て、質問もあまり無く無事終了した。ただちょっと違ったのは、長葉校歌の斉唱、音頭を取る人も無く、一斉のスタートとはならず、チグハグ、いつもの勢いはなく寂しいスタートとなってしまった。来年はコーラス隊を設けて時期総会に臨むとの来年総会開催担当の長崎支部長の山中氏の挨拶で締めくくりとなった。この後パワーポイントで薬学部の近況報告があり、畑山薬学部長の挨拶で懇親会が始まった。

懇親会でも時間の経つのを忘れるくらい皆話に夢中だったようだ。このあと我々クラス会は、地

元の荒木さんも交えてこの会場の喫茶店で一休みしてホテルに戻り、ミニ同窓会の始まりとなった。しかし翌日の出発が8時と早いため、一旦10時にはこの会を閉めることになった。それぞれの部屋に戻っていったが、翌朝の話によると、それぞれの部屋で遅くまで話が弾んだとのことだった。我々男性5人も少々宴会を続けることになった。途中、今回最も張りきっていた下野が直前に参加できなくなっていたため、部屋から電話する事になり、こちらの様子を知らせた。

翌日は予定通り8時5分には21人乗りのマイクロバスで淡路島に向かった。やはり元気な人が前方に、少々おとなしい男性が後方に座っての出発であった。空は真青、それほど暑くも無く、旅の始まりには最高の天気、いつも我々の同窓会は天気に恵まれている。2日間全く素晴らしい天気だった。ちなみに梅雨に入ったのは帰った2日後だった。大阪のビルの谷間を抜け明石海峡大橋を渡るころはもう景色に見とれ、それとも疲れか、無言、静かなること枯れ木のごとく、だった。

百人一首より

淡路島かよふ千鳥のなく声に

幾夜寝ざめぬ須磨の関守 源 兼昌

この後、一路新人形浄瑠璃館へ、阿波十郎衛の我が子との別れの場面に感涙し、屋上から瀬戸内海淡路島の鳴門海峡を見て、大塚美術館に向かった。この浄瑠璃館は私の記憶によれば港の近くにあり、古い劇場でそれぞれの人形が飾ってある2階建ての小屋だった。途中ルネッサンスホテルで昼食をとり、美術館に着いたのが2時、4時までを自由時間にそれぞれで見て廻る事にした。広い、数が多い、本当に疲れた。途中ダウン、眠たい、どこか横になりたいと思いエントランスのところの喫茶店に入る。中村さん達3人がすでに休憩中、疲れたのは私1人ではなかった。約束の集合時間の4時にはほとんどが出口の所にいた。品川、西村は最後まで案内人の後について廻ったとのこと。

ホテルでの宴会は6時半から、いつものようにわいわいがやがや。しかし皆疲れていたのだろう。二次会はホテルのバーでと思っていたが9時頃になると、もう部屋に戻ろうよ、という雰囲気になっ

ていた。部屋に戻っても酒がすすむわけではなかった。それで次回と同窓会はどうするかという話題になった。昨年嬉野での話では、松村の所の米子での開催となっていたはずだったが、米子ですという積極的な意見は出なかった。代りに出たのが北海道の旭山動物園、しかし未だすんなり決まったわけでも無さそう。11日は朝9時にホ

テルを出発、途中花のガーデンや野島断層（1995年1月17日午前5時46分に起った兵庫県南部地震で出来た断層；淡路島北淡町に保存）をみて、明石海峡大橋の下の道の駅でお土産等を調達し最後の解散地三の宮へと向かった。この中華街で昼食をとり、それぞれ帰路について、今回の同窓会も無事終了した。



平成19年6月10日 於 大塚国際美術館

## 小林龍二, 下村 脩 両先生の特別講演会「薬学研究の楽しさと喜び」及び下村先生の長崎大学名誉校友記授与式を終えて

長崎大学薬学部地域薬剤師卒後教育研修センター長 中島憲一郎（昭46）

長崎大学薬学部地域薬剤師卒後教育研修センターは、薬学部の研究教育の活性化を目指して、同窓生はじめ多くの皆様方からいただいた寄付金により、平成17年に設置されました。薬学六年制のスタートにも合致していたことから、地域薬剤師の卒後教育研修の一環として、実験や演習を取り入れた非常にユニークな研修と、各界で活躍中の同窓生を講師に招いての講演会を実施しています。

本年度は第3回の講演会として、国外で活躍中の研究者に講演していただく企画をたてました。小林龍二先生（院55）と下村 脩先生（昭26）のお二人です。なお、下村 脩先生は昨年「朝日賞」

を受賞されたことが評価され、この度、長崎大学名誉校友の称号が授与されることになり、その式典も同時に開催されました。

今回の講演会には、同窓会の皆様、在学生、地域薬剤師の皆様など総勢413名の参加がありました。久しぶりに中部講堂が一杯になり、大変盛会でした。ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

さて、小林博士は現在、米国テキサス大学 MD アンダーソン癌センター教授で、長崎大学大学院薬学研究科の修士及び博士課程（指導教官、鶴大典教授）を修了しておられます。これまで、米国のハワイ大学、コールド・スプリング・ハーバー



満席となった中部講堂



学部長より記念品の贈呈



第三回 長崎大学薬学部地域薬剤師 卒後教育研修センター講演会 平成19年10月20日  
懇親会での記念写真

研究所及びテキサス大学において延べ23年に亘って研究を続けておられます。専門はプロテオミクスの研究ですが、今回の講演では「プロテオミクスの新展開」と題して、最先端のプロテオミクスの研究状況を、これまでの研究経過や成果を交えながら分かりやすくお話いただきました。ポストゲノム時代の一翼を担うプロテオミクス研究における癌など重篤な疾病のマーカー検索やこれからの研究の方向性など、さらに理解が深められたと思います。

一方、下村 脩先生は現在、米国マサチューセッツのファルマウスに住んでおられます。昭和26年に長崎医科大学附属薬学専門部を卒業された後、同助手、名古屋大学助教授を経られて、米国プリンストン大学上席研究員、ウッズホール海洋生物研究所上席研究員を歴任されました。平成13年に

ウッズホール海洋生物研究所を退職された後は、ご自宅の研究室で生物発光の研究を楽しんでおられます。先生の米国での研究生活は50年近くになるろうとしています。今回の講演では「クラゲ中の二種類の蛋白質「イクオリンと緑色蛍光蛋白質(GFP)」の発見とその生命科学への貢献」と題してお話いただきました。下村先生はこの50年の間、生物発光に関する研究を継続しておられますが、その最大の業績ともいえるイクオリンやGFPの発見に至った状況をユーモアを交えながらお話しくださいました。5万匹のオワンクラゲから僅か2mgのイクオリンを取出し、発光反応機構を解明していく努力は、並大抵のことではありません。「この研究に費やした長い年月や資金、そして多くの偶然の中、一つでも違っていたらこの発見は無かったであろう」と感想を述べられました。非

常に奥深く感動的な言葉でした。先生が良き助手である奥様と共に歩んでこられたこれまでの長い研究生活を多くの学生が感銘を受けながら聴いておりましたが、彼らの将来にとって、きっと役立つ話であったろうと信じています。

下村先生への長崎大学名誉校友の称号授与は、先にも記載しましたが、昨年、朝日新聞社が提供する「朝日賞」の受賞が評価されたものです。朝日賞は科学や芸術など非常に優れた業績に対して贈られる賞ですが、先生は「緑色蛍光たんぱく質 GFP の発見と生命科学への貢献」で受賞されました。今回、講演に先立って斎藤 寛学長から名誉校友記が授与されましたが、学長は「150年の長崎大学の歴史の中で、最も喜ばしい日となりました」

とお祝いの言葉を添えられました。なお、本校の名誉校友は大学の名を大いに高らしめた卒業生に贈られるもので、下村先生が3人目となります。

先生方のご講演のあと、ホテルニュー長崎で懇親会を開催しました。学長、学部長はじめ60名余の参加を頂き、両先生を囲んで大変和やかで楽しい懇親会となりました。ご参加いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

長崎大学地域薬剤師卒後教育研修センターは、これからも長薬同窓会と連携しながらより良い、より充実した地域薬剤師の卒後教育研修を目指して取り組んでまいります。

今後とも、皆様方のより一層のご協力とご助成をお願いいたします。

## 47年卒業生リレー報告

松本 逸郎 (昭47)

47年卒業生の皆様、お元気でしょうか。同窓会近況便り『リレー報告』も今回で3回目となりました。皆様お楽しみ頂いておりますでしょうか。

今回は2名の方の近況報告と11月23日の同窓会の様子を掲載できました。ではお楽しみ下さい。

## 会社は誰のもの？

小池 正博 (昭47)

「会社はだれのもの？」。この質問に対し、最近の若者のほとんどは株主のものと答えるに違いない。社長のものでもない、従業員のものでもない。資金を出している株主のものである。したがって、会社は株主に損害を与えないように経営され、利益を上げる。株価を上げ株主への配当を増やす。今の日本の企業のほとんどがこのコンセプトのもとに経営されていると言う。

しかし、果たしてそうであろうか？

我々が学生時代を過ごしたのは、1960年代の終わりから70年にかけて、学生運動がもっとも盛んなころであった。長崎大学でも、例に漏れず、学生会館問題で大学と学生が衝突していた。自主管理を要求する学生とそれを認めない大学との戦い

である。ついに学生は大学封鎖、学生は後期試験ボイコットを決議し実行した。封鎖解除のため機動隊も導入された。原子力空母の佐世保寄港に反対して、多くの学生と機動隊の衝突があった。学生が民衆の先頭に立って、資本家と戦い労働者の世の中をつくろうと息巻いていた。人々は、高度成長と引き換えに公害、大気汚染、光化学スモッグ、森永ドライミルク事件、カネミ油症、スモン、サリドマイドなど薬害に苦しみ、科学技術罪悪論を信じた。一方では、大阪万博が牽引して戦後最高の好景気が続き、人々の生活も豊かになっていった。経営陣と組合の対立からストライキが頻発し、交通機関が全てストップする交通ゼネストも経験した。大学と企業の共同プロジェクトは、

産学協同という極めて悪いイメージの言葉で総括され、大学が企業の金儲けに加担することは罪悪とされた。

薬学に関係することで、当時の風潮を象徴する話は風邪薬の定義である。いわゆる総合感冒薬には咳止め、抗ヒスタミン薬、解熱鎮痛薬が含まれ、これらは単に風邪の症状を緩和する効果しかない。風邪は、薬なしでも2～3日安静にしておけば、自然と直るものである。しかし、当時の解釈では、「風邪薬は労働力の再生産の手段である。労働者に2～3日の休養を与えず、いわゆる対症療法薬を飲んで労働を強いるための手段の一つ」と捉えられていた。いわゆる資本家の搾取と労働者の抵抗の時代であり、学生はいわゆる労働者の解放、資本主義世界の革命を訴えた。しかし70年安保が終わり、大学立法でいつの間にか大学は静かになり、学生は一見平和な学生生活を送ることになる。われわれの眼から見れば、大学がレジャーランド化し、学生は政治に無関心になり、“自分らしく”と表現する個人的な幸せを願う風潮に変わった。

世界の労働者を思い、日本の将来を心配し、学生運動に熱心だったいわゆる団塊の世代は、モータリ社員となり日本の戦後復興の原動力となり、今日の日本の繁栄を築いた。環境破壊も省みず経済発展を求め、やっと今頃になって森林伐採、地球温暖化など地球環境が犯されている現実を知ることになる。政治家と官僚、業界が癒着し、政治と金、年金、天下り、談合問題が噴出し、役人天下の日本の行く末を案じる。国際競争力強化の名のもと、企業はリストラにより人件費を削減、代わりに派遣やパートの非正規社員が増え、大幅な人件費カットにより会社の利益が増加、株価が上昇し、株主への配当も増え、あたかも景気が回復したかのごとく報道されている。しかし、実際には、大企業から近所のスーパーまで、時給何百円の非正規社員が企業の利益を支えている。株の売買と配当利益により、株主は汗も流すこともなく、巨大な利益を得る。非正規社員は、一生懸命働いても年収200万円以下。市場原理主義の下、弱者が切り捨てられ、マネーゲームのホリエモン、村上ファンドなどが巨利をむさぼる。格差社会といわれ、貧富の差が大きくなり、このまま市場原理主義路線を放置しておけば、まさに新たなプロレ

アート革命の心配が杞憂でなくなるかもしれない。

世界に誇るに日本人の勤勉性は、いつの間にか失せてしまい、凶悪な殺人事件が起り、官僚は天下り、政治家は世襲し、二世三世の議員や閣僚が増えて、国家国民の命運を預かる気概は失せた。周りに担ぎ上げられるまま総理大臣にまで上り詰め、その結果、国会の所信表明の後、前代未聞の辞任劇。このような“弱い”二世議員が総理大臣になれる世の中、何か変ではないか。この総理大臣のとき、究極の決断を迫られるような国家の一大事が起きなかったことがせめてのもの救いだ。

私自身、定年まであと2年を残すまでになった。大学を卒業して入社した会社は、当時抗生物質のトップメーカーで、大阪道修町の御三家といわれる製薬トップ企業であった。その中央研究所に入社が決まり、大阪で一旗上げる思いで長崎を出て大阪に向かった。当時、業界随一の壮大な中央研究所で実験できることが誇りでもあった。しかし、この32年間に高齢者が増え、がん、成人病が増えるなど医薬品産業の構造変化が起り、製薬業界のグローバル化や統合・再編で今では準大手の位置に甘んじている。私自身も、32年勤めたその会社を昨年やめ、いま外資系の製薬会社で専門知識を生かした新薬開発に携わっている。

研究所で新薬の開発を目指して働いた32年の間の社会の構造変化、価値観の変化をながめ、そしていま自分自身に「会社は誰のためにあるか？」と改めて問いなおす。株主のものではない、従業員のものでもない。やはり社会のものであり、投資の対象であってはならない。決して社会との関わりをなくしては存在し得ないし、社会へ貢献しない会社は存続し得ないと強く思うようになった。

いまだ不治の病であるガンの新薬を待ち続ける患者は多い。海外では多くのがん患者に使われ、劇的に効果を示す新薬が、日本ではなかなか承認にならない。いわゆるドラッグ・ラグの問題が指摘されてもなお、厚生労働省、PMDA(医薬品医療機器総合機構)による新薬審査には多くの無駄とも思える時間が必要である。その間に、多くのがん患者が死んでいく現実を当局の人たちは知っているのだろうか？政治家は誰のために政治を行うのか。国益のためという美名の下、国民が悲惨な思いをすることがあってはならない。会社は社

会に貢献し、政治家は国民に目を向けた政治を行う。当たり前なのが、なぜか当たり前でない。われわれ団塊の世代は、もはや社会への影響力は

なくなってきた。これからは21世紀を担う若者が、安心して平和に暮らせる“美しい国”日本を築いて欲しいと切に願う次第である。

## 漢方術古典に親しむ

大山美智子（昭47）

薬学部を出て、35年という歳月が過ぎました。同期の皆さん、如何なされてますか？

私は、卒業後、病院勤めをした後、思いもかけず31歳で開局という道を選んで、今日に至っております。

まず、開局するにあたって、尊敬する大先輩から、プロとして常に勉強を欠かさずにいること、それに自分にしか出来ない技術を身につけること、というアドバイスを頂きました。よくよく考えれば、口下手で社交的でもない人間がする仕事に対してもっともな助言であり、そこで、勤め時代に度々おこしていた膀胱炎を最終的には漢方薬と養生で治した体験を基に、迷うことなく漢方術という道を選び、こつこつと勉強を重ねてきました。

初めのうちは、薬剤師会等の漢方研究会に参加していましたが、開局3年位たった頃、すばらしい師匠にめぐり合うことが出来、漢方術古典はもとより、方剤の使い方、生薬の良否鑑別、更には人間としての在り方まで、みっちりと教えを賜りました。

中国哲学思想の古典に四書五経がある様に、東洋医学の経典である『黄帝内経・素問』『靈樞』『難経』『傷寒論』『金匱要略』を、先ず平易な解説本から始め、そのうち漢字だらけの原文が読める様になるも、何度も何度も繰り返し読むうちにまた新しい発見がありと、何とも奥深く、日々研鑽を積みかさねてゆかぬ限り上達しない職人道だと分かって参りました。

そこにある真理とは、天人合一思想であり、まさに人体は小宇宙であり自然の一部で、大宇宙の天地自然の摂理に則った生き方こそ、心身の健康

を保つ基本で、その陰陽のバランスを崩し病んだ者に、その自然治癒力を発揮できる様、少し後押しするのが漢方術なのであります。他の療法でなかなかうまくゆかぬ疾病が、時たま、漢方術で快方へということがあると、嬉しくなり、また研究を重ねて世の役に立ちたいと、この四半世紀余り、無我夢中でやって来ました。

その間、師匠や研究仲間と、仲景医学研修団と称し、中国や台湾に研修に行ったことも楽しい思い出です。特に、ウルムチや敦煌で、麻黄や甘草の自生地を訪れ、大黄の赤い花を見、又、雲南では、モルヒネを含む大きな花穂をつけたケシを見物、更に、北京中医学院や蘭州中医学院での研究会に参加、又、北京、西安、桂林、昆明などの病院視察など有意義な体験もし、そして、天山山脈にかかる残雪の美しかったこと、今でも宝物のように心に浮かんできます。

生涯現役を貫き、多くの著書を残された師匠は、今春、仙人になられました。ひとつの道を極められた先生に習ったことは、私の人生で、真の財産となっております。

処方でも、生き方でも、“シンプル・イズ・ベスト”を信条に、学生の時よりも本を読み、勉強をし、工夫と実践を心掛けて来ました。まだまだ発展途上ですが、歳を重ね、若い頃には見えなかったものが見え、何ものにもとらわれぬ自由な考え方が出来、何よりも、心穏やかに過ごせていることは、本当にありがたいことで、これも漢方術やいろんな人のお陰と思っております。

長薬時代のなつかしい顔を、いっぱいいっぱい、想い浮かべながら筆を取りました。

## 昭47年卒同窓会イン東京

森 賢造 (昭47)

2004年の広島で開催の同窓会時の約束通り、東京での同窓会を11月23日に東京の京王プラザホテルで開催しました。

これまで長崎、福岡、京都、台湾、広島、と開催してきて、今回初めての東京開催だけに、関東方面に住みこれまで参加し難かった人たちが7名参加されました。その多くが同窓会初参加ということで東京開催も一定の効果をあげたようです。それ以外にも九州や中国地方からも13名の参加があり、総勢26人が集まりました。

物故者の冥福、大間賢一氏の乾杯のあと食事をしながらの歓談となりました。皆テーブルを入れ替わりながら思い出話、現状報告と話題は尽きません。定年まであと少しに迫って来ているだけに、会社を辞めて再就職をした人たちも現れてきました。

今回の同窓会にはほぼ全員が定年を迎えています。そんな同窓生のもう一つの話は子供たちや孫たちの話でした。そんな話から東京で暮らしている娘や、息子の合コンを計画しようと言う提案がなされ了承されました。東京に居る適齢期の子供たちの合コンについては今回の幹事まで連絡してみてください。

2時間の同窓会はあっという間に過ぎ、今回初参加の谷口浩行の締め言葉で一次会は終わりました。続いてカラオケとラウンジに別れて二次会を楽しみ10時半に散会となりました。

今回の同窓会は2年後に西垣敏明氏のお世話で、バリ島で開催することになりました。2回目の海外での同窓会になりますが、多くの参加者で盛大に開催したいです。そして卒後40年の同窓会を長崎で開きたいということになりました。



2007年11月23日 於 京王プラザホテル

## 杉井通泰先生を偲んで

北村 美江 (昭50)

杉井先生の訃報を知ったのは、今年の4月早々に届いた先生のお嬢様からの手紙でした。3月16日夕方に、いつも通り自宅で過ごされていて、ひとり静かに旅立たれたこと、心不全らしかったとのこと、本人の希望で家族葬をされたことなどが丁寧に書かれていました。86歳でした。前年の8月に奥様を急性胃がんで亡くされたことを年末の挨拶で知り、杉井先生に久しぶりにお手紙を書きました。その返事に、先生が落胆のあまり元気を無くされ、寝たり起きたりであることを、お嬢様から知らされました。暖かくなったら励ましに一度訪ねたいと思っていたところで、本当に思いがけなく、残念でした。身内の人にも世話をかけることなく、静かに逝かれたように、本当に最後まで清々として上品な先生らしい生き方をされたのが伝わってきました。今、しみじみと先生を思い出し、先生を失った何とも言えない寂しさにおそわれています。

先生は京都大学から米国 Cornell 大学への留学後に、以下の略歴のように長崎大学薬学部の薬品分析化学教室の教授として赴任され、昭和44年に新設の「放射薬品学」教室の初代の教授として、定年まで長崎大学薬学部のために貢献されました。在職中は科学技術庁の放射線関係の委員や県の温泉審議会の世話などをされていたことを記憶しています。定年後には長崎大学名誉教授に、また、これまでの活躍や貢献に対し、旭日中綬章を受けられました。

### 略歴

昭和38年11月1日 京都大学化学研究所・助教授  
日本薬学会奨励賞受賞  
「含硫アミノ酸同族体の生合成に関する研究」

昭和39年10月～昭和41年3月

米国 Cornell 大学、  
F.C. Steward博士の所に留学

昭和41年5月～昭和44年1月

薬品分析化学教室 教授

昭和44年1月～昭和61年3月

放射薬品学教室 教授

昭和61年5月23日 長崎大学名誉教授

平成6年11月3日 旭日中綬章受章

先生は分析化学を専門とされ、特にトレーサーを用いる放射分析の権威で、先生の著書「放射化学及放射線保健学(広川書店)」は今も広く大学のテキストとして用いられています。その先生が、植物組織培養の元祖である Steward 博士のもとで始まった新領域の研究を将来性があると考えられ、その技術をいち早く長崎に導入されました。私は先生の最後の助手として、10年間を先生の下で過ごさせていただきましたが、それは先生の人格に惹かれたことと、先生が始められた植物組織培養に魅了されたためでした。研究室で見る先生は、いつも白衣姿で、その深い知識と緻密で丁寧な実験にはいつも頭が下がりました。研究面だけでなく、人間としての生き方も教えていただいたと思います。決して威張ることも媚びることもされず、不条理なことには静かな憤りを示され、学生やスタッフへの思いやりを忘れられることはありませんでした。また、先生は決して堅物ではなく、知的好奇心やユーモアにあふれた人でした。三浦先生や学生さんと一緒に、恒例の、船に乗っての魚つりと、その後、先生のお宅でいろいろなお話を聞き、奥様の手料理をごちそうになったことが、今も懐かしく思い出されます。教室のメンバーを当時珍しかったビデオで撮影、編集されたものを、みんなで鑑賞し、大笑いしました。科学ものはもちろん、漫画から女性週刊誌、歴史小説まで何でも興味を持たれ、先生と本を交換して読んだことも多々ありました。そんな先生のもとで過ごせて、なんて幸せだったのだろうと、今さらながら痛感します。

薬学部は改築され、今では放射の研究室も無く

なり、杉井先生を知っている人のほうが少なくなりました。それでも薬学部を思い出す時、白衣を着た細身で長身の先生が、はにかんだような笑顔で迎えてくれそうな気がするのは私だけでしょう

か。先生の門下から巣立った卒業生の一人として、先生の在りし日を偲び、先生に感謝し、心からご冥福をお祈りします。

## 昭和52年薬学部卒学年同窓会

池崎 隆司（昭52）

11月10日(土)、ハウステンボス内のホテルデンハーグを会場に学年同窓会が開催されました。平成9年の長崎、平成14年の福岡を加え今回が4回目となります。

同窓会に先がけ準備のため長崎県内在住の有志が集まって、4月28日一回目の話し合いが持たれました。メンバーは準備委員長の私のほか江良さん、佐藤さん、田中さん、藤原さん、光富君、長井さん。50代の社会人が7人も集まってコーヒーやパフェではあんまりだろうと割烹を会場に選んだのが誤りで、真面目に議論しているその横で笑い出す者あり、携帯電話に向かって大声で捲くし立てている者ありと全くの酩酊状態。延々4時間も費やして決まった事は“やろう！”だけでした。

それでも皆自分の持ち味を生かして準備に取り組み、無事本番を迎えました。

南京ハゼが赤や黄緑色にそまり秋の風情が漂う



2007年11月10日 於 ハウステンボス

会場に、全国から31名の同窓生が集まりました。30年振りに再会した同窓生もいたり、開会前から昔話で盛り上がります。会場内のテーブルにはスタッフが用意した大学入学時の証明写真や当時自己紹介を兼ねて作成した冊子が置かれ、一気に時間の空白を埋めてくれます。気分は学生。でも話の切れ目に一瞬我に返るとそこには現実の世界が。万歳の挨拶をした山田君。5年前は白髪交じりだった彼の頭は、今回は白銀の世界でした。大学教授として宮崎県に移った松野君は、地鶏の食べ過ぎか？さらにヘビーに。製薬メーカー勤務の北村君は、手を擦りながらの話し方が止まりません。

30年間を行きつ戻りつの一次会が終わると、オレンジ広場を通過して二次会の会場へ。付近は既にクリスマスのイルミネーションで彩られ、頭上に

上がる花火を見物しながらの移動でした。二次会には群馬県から参加してくれた小林さんのお嬢さんも合流しました。20代に戻った末安君？はじめ男性数名がお嬢さんの周りに群がります。“自分の年齢をわきまえないと”と割って入った私も気がつけばツーショットの写真に収まっていました。二次会が終わったあとも話は尽きず、その晩は深夜まで歓談が続きました。

翌日参加者を見送って帰宅する車の中での会話。“次は5年後かあ、その後どうすんの？”、“その2年後は還暦じゃあ？”、“還暦が控えてるんだったら7年後にしたらいいじゃん”。みな言いたい放題です。“一浪の私はどうすんねん”そう心の中で呟きながら車を走らせていました。福岡組のみなさん、今回はよろしく！

## 久しぶりに「えびの高原」に行き霧島縦走をしてきました！

山口 正広 (昭56)

同窓生の皆さんお元気にお過ごしでしょうか。昨年は卒業25周年を迎え、初めての宿泊同窓会を雲仙で開催したところ、多くの方々に参加いただきありがとうございます。

さて、長薬同窓会から同窓会報「クラス会及び近況だより」への寄稿依頼があり、何を書こうかと迷っていましたが、私の唯一の趣味とも言える山登りについて書いてみたいと思います。

私は、現在、長崎県庁の廃棄物・リサイクル対策課というところに勤務しておりますが、その前は島原にあります県南保健所に勤務しており、その時の仲間で年に数回、遠くは屋久島宮之浦岳や富士山、近くは雲仙普賢岳や久住山に登っています。そして、今年10月13日、14日の1泊2日の日程で二十数年ぶりに宮崎県えびの高原に行き、えびの高原－韓国岳－獅子戸岳－新燃岳－中岳－高千穂河原の霧島縦走にトライしてきました。

今回の参加者は、私を含めて8名でした。職場は現在バラバラで、遠くは新上五島町から参加した方もおられました。職種は、獣医師や保健師、化学職、臨床検査技師、事務職など様々で、県南

保健所に嘱託で来られていた警察OBの方も参加されました。

当日は午前3時に諫早駅近くの県の合同庁舎に集合、今回はキャンプ村に泊まるということから諫早駅前の西友で白菜や長ねぎなど、夕食（もつ鍋）の材料を購入、10人乗りのレンタカーに乗り合わせて4時に諫早を出発しました。

移動は、諫早インターからえびのインターまで高速道路を利用し、途中、午前7時すぎ、熊本県の山江サービスエリアで朝食をとるとともに、お茶やおにぎりなど登山のための食料を調達しました。

午前9時少し前にえびの高原キャンプ村に到着。リヤカーを使って荷物を宿泊するバンガローに運搬し、登山の準備をして9時20分頃キャンプ村を出発、9時40分韓国岳の登山口に到着、そこからいざ韓国岳を目指して登山開始。

二十数年前の記憶では、韓国岳の登りはきつかった思い出でありましたが、やはり記憶どおり登り坂の連続で、途中休みながらハアハアと荒い息をついて登り、齢を実感した次第です。

途中から右手側に大浪池が見えはじめ、11時過ぎに韓国岳山頂に到着。当日の天気はキャンプ村周辺では晴れていましたが、韓国岳山頂に近づくにつれ雲が多くなり、頂上についた頃にはガスに覆われ、周辺の景色も見えない状態でした。山頂で記念写真を撮り、周辺の景色も見えないことから早々に山頂を後にし、道に迷いそうになりながら獅子戸岳へと向かいました。獅子戸岳少し手前で休憩を兼ねて昼食をとることとし、おにぎりやビール、少々の日本酒をいただきました。山の上のお酒は特に美味しかったです。

その後、獅子戸岳に午後1時30分頃、新燃岳には午後2時30分頃に到着し、中岳を経由して午後4時15分頃高千穂河原に下山してきました。

途中、新燃岳から中岳に行くルートの間違えそうになりましたが、途中で出会った地元の方の案内で無事に下山することができました。本当に助かりました。

高千穂河原からはタクシーでキャンプ村まで移動し、キャンプ村に到着後は場内にある温泉（冷泉のため沸かした温泉）に入った後、長崎から持ってきた材料を使って料理したもつ鍋をみんなで囲

み、お酒を飲みながらワイワイと時間を忘れて語り合いました。料理の材料に使ったもつは、参加した獣医師さん（県の食肉検査所勤務）が調達してくれたもので、事前に1時間ほどボイルしたものを冷凍して持ってきてもらい、調理後のもつ鍋のもつは非常に柔らかく、美味しくいただきました。

翌日は、えびの高原の近くにある白鳥温泉の上の湯に立ち寄り、ひとつ風呂浴び、その後、えびのインター近くにあるコココーラ・グリーンパークえびのコスモス園を見て、昼食を人吉のエルマナスというレストランで取った後、レンタカーを返す時間の関係もあり、足早に長崎に帰ってきました。

今回は、ハードなスケジュールでしたが、何とか天候にも恵まれ、美味しい料理や温泉を満喫し、満足のいく登山でした。今後も、体力が続く限り、この仲間達と一緒に登山や料理、温泉を楽しみたいと思います。

なお、11月4日には、子供2人を連れて久住山に登ってきました。紅葉が非常にきれいでした……。



## 小山田京子さんを偲んで

藤木 弘美 (昭60)

京子さんが逝ってしまってから、日々の生活の中で京子さんに話しかけることが多くなりました。「きついなあ」「やりたくないなあ」「やめたいなあ」……そして、その後には京子さんが、「また？」とあきれながらも、あの少し高いかわいらしい声で「がんばってね」って言うてくれている気がします。

世間知らずの一人っ子で、自己中心、わがまま放題に育った私にとって、大学時代の初めての一人暮らしは心身ともに大変なものでした。悩み、落ち込むことも多かったのですが、京子さんはいつもやわらかい空気で側にいてくれて、さりげなく助けてくれました。目を閉じて思い出してみても、浮かんでくる一コマ一コマにはいつも京子さんと一緒に笑っている私がいるのです。私は、京子さんが大好きでした。

卒業後は、お互い違った環境になり、それなりに厳しい社会生活の中、度々会うことはできなくなったけれど、それでも久しぶりに会うととたんに学生時代に戻ることができ、思いっきり笑い、はじめて、楽しい時間を過ごしたものです。京子さんが結婚して広島に住むようになってからは、私の方が身軽なのに、「会いたいね、でも福岡と広島は近いからいつでも会えるよね」って言い訳を

して、なかなか会いに行かなかったことが本当に悔やまれます。

亡くなる半年ほど前、一緒に長崎を訪れることができ、久しぶりにゆっくり話ができて嬉しかった私は、京子さんがニコニコしながらついて来てくれるものだから、いろんな所に連れまわして自己満足していたのですが、京子さん、本当は相当無理していたんだと思います。博多駅での別れ際、一旦「またね！」と別れた後、後ろから追いかけてきて、「近いうちに福岡に遊びに来るから！のぞみに乗ったらすぐだもん、これからはちょくちょく会おうよ！」って言った京子さんのその声は今でも頭から離れません。

たくさんの人に優しさと愛情をあげ、たくさんの人から感謝、そして愛された京子さん。離れていても私にとって京子さんは心の支えだったけれど、私は京子さんの力になれたことは一度でもありましたか？病気になってからは、本当に辛かったね。今頃はきっと安らげる天国にいるはずだから、思いっきりゆっくりしてください。そして相変わらず頼りない私を、あきれながら見守っていてくださいね。京子さん、友達でいてくれてありがとう。

## 小山田(飯島)京子さんを偲ぶ

大山さゆり (昭60)

「小山田さんが亡くなりました。」1月9日、岸川さんからの留守電でした。去年の7月16日の同窓会ではあんなに元気だったのに。突然の訃報でした。闘病生活は5年にもなると聞いています。2、3年前会った時にも病気のことは、「考えても仕方がないことだから…」と、愚痴ひとつこぼさず平然とした態度でした。お嬢さんはまだ小学生で、さぞ心残りだったことでしょう。京子さんが学生時代、「私は教育ママになりそう。」と言って

いたのを思い出しました。

大学入学時のオリエンテーションで会った時から落ち着いているなあと思ってました。邦楽部(琴)に所属され、洋服はトラッド系で趣味がよく、周りに流されず、自分というものをしっかりと持っておられる長女らしい、芯のしっかりした、明るい人でした。同じ長大薬学部をご卒業されたお母様を誇りに思われ、よく話題に出されていました。部屋にはビートルズのポスターを張り、メ

ル・ギブソンが好き。映画も大好きで一緒に見に行きました。マッドマックス、スターウォーズII、バックトゥーザフューチャー…、今でもテレビで再放送があると懐かしくなります。

薬学部は女性が多く、合コンの話も多かったのですが、1年生の1学期で飽き、「全部おごり、一次会は寿司ね。」などと傲慢なことを言っていたら、合コンの誘いも来なくなり、女子学生だけで戯れていました。遊び仲間は自然と下宿生、彼氏がいない者と決まっており、京子さん、なっば、チャッピー、私を含めた4人で遊んでいました。みんな、わがままの言いたい放題だったのですが、京子さんだけは言い争っているのを見たことはありませんでした。ちゃんぽんを食べるかスパゲティを食べるかでめめた時、チャッピーがスパゲティ屋に入るの嫌さに階段に座り込んだときも、うまくその場を取めたのが京子さんでした。また、試験前日の真夜中、なっばと私が完全にだらけきっている時に私たちの部屋に来て「あー、ここに来ると落ち着くー。」と一休みし、また黙々と勉強しに帰って行きました。そんな私でも何とか乗り切れたのは先輩に知り合いのいる京さんが積極的に過去問を集めてくれたお陰です。周りにもよく気を使い、皆のつまらない冗談にも反応してその場を盛り上げてくれていました。

卒業後、故郷大牟田の病院に勤められ、結婚して広島市に移られました。介護支援専門員の免許

も取られ、ケアプランを立てる仕事をしているとのことでした。私もその免許を取得しましたが、ケアマネージャーというとかっこいい仕事のようにですが、実は、利用者、主治医、サービス提供者、三者三様の要求をみんなが納得行くように、特にクライアントのニーズに対応したプランを利用限度額以内にまとめなければなりません。お年寄りの話は長く、要領を得ません。また、主治医の先生は自分と敵対する介護サービス事業所の利用にいい顔をされません。おまけに自分の都合であるそこはだめ、ここだったらいいと指定までされる、などの苦労話を笑いながら明るくされ、さすが学生時代から調整役だった京子さんにはケアマネは天職かとも思いました。仕事の内情を知る私には闘病との両立には舌を巻く思いでした。なんと去年の12月まで仕事をされ、会社には退職の希望を出し、引継ぎ中だったと聞いています。責任感も強い人でした。

忙しさに紛れ、去年の11月中旬のメールが最後となってしまいました。うちの子の受験が落ち着いたらまた会おうね、と言っていたのに叶わぬこととなりました。携帯の京子さんのアドレスもメールの記録もそのままにしています。

最近、初めてメガネを購入し、肝臓の値も気になるようになりました。人生の折り返し点を過ぎた今、人間誰しもいつ終止符が打たれるかはわかりません。待ち受ける運命を知りながら、最後ま



平成18年7月16日 昭和60年卒同窓会  
前から2列目左端が小山田さん

で前向きで朗らかでさえあった京子さん。逆境にある時、あの十分の一でも真似できればと思います。

京子さんと去年の同窓会でもっと話しておけば

よかった、もっと連絡を取っておけば良かった等、悔やまれますが、最後のお別れはできました。学生時代と変わらない穏やかなお顔でした。どうぞ安らかにお眠りください。

## My First Day in Japan

Sanjit Kumar Dhar (博平 5 入)

MONBUSHO approved my scholarship; I therefore, was very delighted hoping that soon I leave my country (Bangladesh) for higher education. Before, I only heard about JAPAN, now I can be able to see the country by my own eye, remembering that I felt very excited. Everything is fixed; I reached at Nagasaki airport right on the scheduled date. Unknown and unseen country, so many questions came to my mind but where I will get all the answers? Dr. Koji Arizono sensei (who was my co-supervisor) received me at the airport. I followed him to his car taking my entire luggage with me. On the way to Nagasaki University, he took me to a restaurant to finish my lunch. Probably, he could understand that I might be hungry. After finishing my lunch we reached at the University yard. This is Nagasaki University, this is the Faculty of Pharmaceutical Sciences building, I felt very excited. On the way to the University, Dr. Arizono sensei introduced me with the famous office buildings, shopping centers and historical places. By the way, since I could not able to speak Japanese at the beginning, Dr. Arizono sensei spoke English with me. He just came back from USA after completion of two years post-doctoral program, so as a matter of fact he was feeling comfortable (I think) in speaking English with me. And I myself, while in Bangladesh could able to speak English to a certain extent, because English is the second language of the country.

However, after entering the University we reached at the faculty building for Pharmaceutical Sciences. University was closed that day; hence I did not have opportunity to meet with any student in the laboratory. But very fortunately, we met with Dr. Yamada sensei; Dr. Arizono sensei introduced me with him. Interesting, Yamada sensei showed negative attitude to speak English with me, but indeed He spoke English with me. I was very surprised I thought that he is just saying that he can't speak English but as a matter of fact he can speak at least for general conversation. Dr. Arizono sensei showed and explained me about the lab space, activities and responsibilities and specially emphasized about my Ph.D. mentor Dr. Toshihiko Ariyoshi. Although I could not meet with Dr. T. Ariyoshi because he was out of town in occasion of conference on Drug metabolism, but he collected information from Dr. Arizono about my arrival and after that usual activities. That day I did understand that a responsible person can't avoid his responsibilities.

After spending sometime in laboratory, Dr. Arizono sensei brought me to the foreign student Dormitory where I need to reside while I stayed in Japan. Showing me the room he said, here is your room. The room was very beautiful, compact and I felt very good and sleepy moreover, very tired after a long journey. Dr. Arizono sensei probably understood that I need some rest as my facial expression was full of tiredness just because of long journey and also

time-lag. So he told me to take rest and left my apartment. I was so tired that I just wash my face, change the dress, closed the door and slept. I could not remember when I woke up from sleep however, when I open the door I found that something (utensils) was kept in front of my room. I easily understood that Dr. Arizono sensei did this; I appreciated, and thought it was a good job. I had some food with me; I finished my dinner with it and went to sleep again.

The next day morning I need to go to the laboratory, I felt excited, tense, fear, braveness everything was working in my mind. After finishing my breakfast I went to the laboratory, I met with my mentor Dr. T. Ariyoshi and I was introduced with the students in the laboratory.

## 和訳 初めての日本での一日

文部省の奨学金を得ることが出来、より高い教育を受けられることに私は期待に胸を躍らせて、母国バングラディシュを旅立つことになった。それまで私は日本について聞いたことはあったが、実際に自分の目で日本を見ることが出来ることを思うと、とても興奮していたのを覚えています。それから、予定通り長崎空港に降り立った私は、未知の国、日本でいろんなことを解決できるのであろうかと感じていた。空港にはこれから所属する研究室の助教授、有菌幸司先生（院昭54）が迎えに来てくれた。それから、先生の車に荷物を運んで車に乗り込んだ。空港から長崎大学へ向かう途中、レストランで昼食をとった。おそらく、その時の私の様子からおなかがすいていることに気付いてくれたのであろう。レストランで昼食後、私たちは大学へと向かった。はじめて見る長崎大学薬学部の建物を見て私はとても興奮した。先生は途中、有名な建物、ショッピングセンター、史跡など案内してくれた。このとき私は全然日本語を話せなかったので、有菌先生は英語で話してくれた。ちょうどそのとき有菌先生はアメリカでの2年間のポストドク研究を終えて帰国したばかりであったので、実際は先生にとっても心地よかつ

After spending some time with them I could able to add myself as a new member of the team. Soon my tense, fear disappeared, the whole day I was engaged with the students and with some very little official works. Thus I lost myself in the new community, new environment and new team.

Presently, the author is working in USA in the University of Kentucky, Department of Toxicology as a senior scientist for more than five years. The author is actively working on research particularly on gene regulation with a special emphasis on tumor suppressor gene p53 and MnSOD (manganese superoxide dismutase). The author is forty five years old married person living together in a family with two sons of nine and seven years old.

たのだらうと私は感じた。バングラディシュでは英語は第二言語であったので、私はある程度英語を話すことができた。

大学構内に入り薬学部の建物へと向かったが、その日は休日であり、残念ながら研究室の学生とは会うことが出来なかった。偶然、山田先生とお会いでき、有菌先生が紹介してくれた。山田先生は戸惑いながらも英語で話してくれた。山田先生は英語を話せないといったけれども、英語で普通に会話をしてくれたのでとても驚いた。有菌先生は研究室内を案内してくれ、それから研究内容、仕事のこと、指導教官となる有吉敏彦先生についていろいろと教えてくださった。有吉先生は薬物代謝に関する学会出席のため不在で、その日は会うことが出来なかったが、有菌先生から私が無事到着したことを聞いていたようであった。そのとき私は、自分の責任を果たすことが大切であることを学んだように思う。

研究室で過ごしたあと、有菌先生は私がこれから生活する留学生会館へと連れて行ってくれた。「ここが君の部屋だよ」と部屋を案内してくれた。部屋を見るなり、とても素敵な部屋だと感じたが、その一方心地よく眠気に誘われた。有菌先生は私

の長旅と疲れた表情を見て察してくれたのか、「今夜はゆっくり休んで」と言って去って行った。本当に疲れていた私は、顔を洗い、着替えを済ますとすぐに眠りについてしまった。いつ目が覚めたのか覚えていないが、ふとドアを開けたところにカーテンがおかれていることに気づいた。私は容易に有菌先生が置いていってくれたものだと感じた。とても嬉しく、ありがたかった。それから持ってきた食べ物を夕食として食べ、すぐにまた眠ってしまった。

私は研究室に行く日の朝、興奮、不安、勇氣、いろんなものが頭の中を駆けめぐった。朝食を済ませ研究室に向かった。私は指導教官の有吉先生

と会い、他の学生に紹介された。しばらくみんなと過ごしていると、はじめて研究室の一員としての自覚が出てきた。緊張と不安が消え、学生と話をしたり、事務的な手続きを済ませた。このようにして、私は新しい環境と新しい研究チームに容易に溶け込んでいくことが出来た。

現在私は、アメリカケンタッキー大学(Dept. of Toxicology)で研究をして5年が過ぎた。現在、腫瘍抑制因子 p53 と MnSOD に関しての特異的遺伝子調節に関して興味を持っている。私は現在、45歳になり、妻と9歳と7歳の息子がいる。

(日本語訳は下條氏(平2)にお願いしました)

## '07 欧 州 紀 行

平良 文亨(平9)

平成19年10月2日午前、成田空港を発った。目的地は、イングランド北西部に位置するマンチェスター。ドイツのフランクフルトで乗り継ぎ、成田からの所要時間は既に15時間を越えている。長時間のエコノミークラスでの修行に加え、成田空港出発前の朝食、機内食2回(他に軽食+ドイツビール、ワイン)とお腹は既に限界に近づいている。しかし、やっと辿り着いたという達成感(開放感)と初めてのイギリス入国という感動で、その後宿泊ホテルでの4回目の食事は何とか食べることができた。

なぜ、私がここにいるのか?それはプライベートで家族とバカンス…ということではなく、仕事で来たのである。

私が所属している長崎県環境保健研究センター(旧長崎県衛生公害研究所、平成19年4月1日に大村市へ新築移転)では、佐賀県にある玄海原子力発電所周辺10kmの防災対策を重点的に充実すべき地域の範囲であるEPZ(Emergency Planning Zone)の一部に、本県松浦市鷹島町が含まれていることから、当センターが主体となって現地での環境放射線(能)モニタリング調査を実施している。このような原子力関連施設が立地または隣接する自治体は、全国で16道府県あり、これら道府

県では連絡協議会を設置し、原子力施設周辺の放射能調査に関連した調査機関の技術の向上等を図るなど日頃より相互連携しており、本県も非力ながら加わっているところである。

今回は、この連絡協議会の一員として、10名程度の海外調査団を結成し、欧州特にイギリスとドイツにおける原子力関連施設の環境放射線(能)モニタリングを中心とした視察を実施した。幸いにも私もこの海外調査団に参加することができたことから、今回このような形で寄稿させていただいた。

渡航期間は、10月2日~12日と11日間で…という硬~い話はここまでとして、今回はイギリス、ドイツでの視察以外のお話をしたいと思います。

まずは、出国前日の10月1日夕刻に、成田空港近くのホテルに参加者が全国各地(北は北海道から南は長崎まで)から集結し、自己紹介もそこそこに一献傾けながらすぐに打ち解けたところで、翌日予定通り出国ということとなった。

最初に降り立った、マンチェスターの入国審査の際、審査官に「何でマンチェスターに来たんだ?」と問われ、「仕事」というと面倒なので、「Sightseeing」(観光)と言ったところ、「こんな田舎町に見る所なんてないぜ!」、「ベッカムでも見

に来たのか？」などとからかわれながら、イギリスに初入国した（因みにベッカムは現在米国のプロサッカーリーグに所属しているが、入国当時は家庭の事情により英国に帰国しているとの情報があった）。確かに、2日間ほどマンチェスターに滞在したが、バス移動中は見渡す限りの放牧酪農地帯という感じで、「マンチェスター＝芝生＋牛＋羊＋馬」というイメージが定着してしまった。しかし、秋田の田舎で育った私にとっては、何となく新鮮かつ懐かしいような景色を体験できて、癒しの時間を得たような気がした。

続いて、ロンドンに移動した。今回の旅行で一番感動した街であった。事前情報では、食事もイマイチだし…ということもあり、あまり期待していなかったが、都会の中にあっても歴史や自然との調和が感じられ、また紅葉の時期ということもあり非常に過しやすかった。大英博物館、国会議事堂（ビッグベン）、バッキンガム宮殿等々の名立たる建物を拝見し、ロンドンバスや地下鉄へ乗車し、ロンドン中心部のハロッズで買い物など充実した時間を過ごすことができた。食事は、聞いていたほど悪くなかった。というか、ビールがあれば何でもおいしく感じられた。フィッシュ&チップ



英国国会議事堂（ビッグベン）



バッキンガム宮殿にて



ライン川にて

プスなどの有名どころの食べ物やコココーラの試飲などあれこれ満喫した。

と休む間もなく、今度はドイツへ移動。世界一セキュリティーが厳しいロンドン郊外にあるヒースロー空港からフランクフルト空港へ。搭乗に際して、審査が終わるのに2～3時間は要することもあると聞いていたが、ラッキーなことに我が調査団の日頃の行いが良いせいか？30分程度で難なく終了した。ロンドンには、再び来ることを心に誓いながら…さ～て、ドイツはどんなところか？ワクワクしながら機内へ。ドーバー海峡を見ながら、あっという間にフランクフルトに到着した。機内では、プロレスラー級の体格のいい男性に、「フランクフルトは楽しいぜ！」との有難いアドバイスをいただき、ドイツ初入国を果たした。

ちょうど週末だったということもあり、日曜日にはライン川クルーズをした。ドイツ国内には約2万戸もの古城があり、クルーズ中にいくつもの古城を見ることができた。周囲には見渡す限りのブドウ畑が広がり、さらに付近一帯に発生した霧が雰囲気を盛り上げていた。

ドイツでもイギリスに負けず劣らずビール三昧であった。かつソーセージがうまいっ！ビール（ビールをとことん飲む人種の総称：造語）の私は毎夜のディナーを満喫した。時には昼間頃からビールを楽しんだ。どちらの国でもビールは何種類かあり、また地域によっても種類が異なったりと目でも舌でも楽しむことができた。ワインもおいしかったが、特にドイツで生産される白ワインが気に入った。食事は、フランクフルトのフランクフルトやブレーメンの牛ステーキが絶品だった。



フランクフルト in フランクフルト



ビールに興じる筆者

あ～このままこの地に留まるのも悪くないな～と思っていたら、もう帰国の途。あつという間の11日間であった。

日中は、仕事に集中。夜や週末は食事や観光に集中。非常にメリハリのある？旅だった。調査団

メンバーの雰囲気も良好で、快適な旅行だった。  
と今日も欧州でのことを思い出しながら、あとは報告書の作成が待っている。がんばれ、自分！

最後になりましたが、少々時差ボケ？の中の執筆により、乱筆乱文であることをお許しください。

#### 【お知らせ～同窓会開催!?～】

平成9年卒業生の皆さま～ん！卒後10年経過しましたが、いかがお過ごしでしょうか？今年の10月ぐらゐに同窓会を企画しようかな～と思っていたのですが、私事（この欧州紀行）のため、機会を逸してしまいました。本当に申し訳ございません。一部の卒業生（当時の準硬式野球部キャプテンN氏、現在陸上自衛隊大宮駐屯地に所属するP佐藤氏を含む数名）からは是非開催して欲しいとの要求がありましたので、来年こそは開催したいと考えております（理事であれば）。

個人情報保護法の基、本年は新しい名簿作成年度でもあることから、この個人情報満載な名簿を活用して卒業生の皆様にご連絡差し上げたいと思います。ご連絡差し上げた際には、知らない振り、居留守等のご勘弁くださいますようよろしくお願い申し上げます。

## 近況だより

松永 隼人（平12）

皆様、いかがお過ごしでしょうか。10月の末に本原稿と向き合い、筆を取らせて頂いております。秋風と虫の鳴き声が季節を想わせてくれます。

学を志して（志学）、大学を卒業・修了した私達の同期生も、今年は全員30歳を迎えることと思います。いつの間にか、長崎大学の薬学部内に残るのは私だけとなってしまいました。最近、学生に平成生まれの方がいることに驚き、当たり前かと納得するということがありました。内省した時、「子供のころに想像していた大人になっているのかな」と考える日々であります。自分は「精神的に子供のままだな～」とってしまいます。幅広

い世代の方に問いたい。「みんなはどのよ？」って。最近、「品格」という言葉が流行っていますが、品格をわざわざ意識しなくてはならないことって寂しいことではないでしょうか。皆様は自分の周囲の事で手一杯で、視野が狭くなっていませんか。私の考える大人とは、ある意味ニュートラルな存在で有りながら、自己の哲学があるヒトです。そして、他人を想い、気配りが巧いヒトだと思っています。ポイントは気遣いでは無く、気配りだということです。気遣いは、自分も他人も疲れてしまいますのでご注意ください。今、自分自身もこの言葉を噛み締めて書いてます。

さて、30歳とは論語でいう「而立」です。これから40歳の「不惑」まで、各々が所属する家庭・社会で中心的役割を果たし、そして迷い、成長していく期間を迎えたとも言えます。そんな忙しい皆様に向けて連絡です。来年度にでも、同期会(飲み会ね、宴じゃ!!)を行う考えでいます。詳細については、同窓会を通して私から連絡させていただきますのでお待ちください。多くの皆様の参加を願っております。「僕は子供のままなので変わって

ないけど、みんなは変わったのかなぁ?僕は少し、涙もろくなりました(感動!).」縁あって同窓・同期生となった仲間として、旧交を温め、新たなネットワークを築けたらと思っております。

末筆ではありますが、このような散文的な駄文になりましたことを、お詫びします。

さあ「行ってきます」って元気に言って学校・職場に行こうや。どこかで、幸せの「お帰りなさい」が待っているよ。

## 薬品製造化学研究室10周年同門会

高橋 圭介 (平13)

それは2005年3月の東京ビックサイトから始まった。「そろそろ製造は10周年だな、同窓会やろう。」薬学会会場で当研究室の先輩であり、恩師の一人であり僕の前任者である江角朋之博士(平7年博入)からそう持ちかけられた。この研究室が10周年という事は僕が薬学部入学からも10周年という

事になる。10年前(1997年)の入学当初は基礎研究に全く興味がなかった自分が、学部生の間に畑山教授、故松村教授、藤田教授、岩淵助教授(当時)、尾野村助教授の各先生の講義を受講するうちに有機化学に惹かれ現在の職に就くというのは全く想像できなかった。その後、徳島での天然物討



論会、仙台での薬学会、京都での IUPAC など学会の折に江角博士と会い、時期、場所、趣旨等の骨子をまとめていった。そしてその間、薬品製造化学研究室の卒業生に会うたびに10周年同門会を計画している事を伝え、気運を上げていく様に努めた。そしてついに2007年5月19日、ベストウエスタンプレミアホテル(旧プリンスホテル)にて薬品製造化学研究室(畑山研)10周年同門会の開催が実現した。

当日、研究室で会場に向かう準備をしていると、岩淵先生、大井(古川)真利子修士(平12)、前山純次修士(平9)に相次いで研究室をご訪問頂いたので、一通り現在の研究室の内部を紹介させて頂いた。昔からある設備、機具等を見て製造時代を懐かしんで頂いたと思う。その後、準備係の学生3名と一足先に会場に向かい準備をしていると、次々に懐かしい面々が来場してきた。結婚された方、卒業以来お会いできてなかった方、初対面の先輩、そして僕が学部2年時の製造実習で指導頂いた武田成子先生(昭36)など卒業生31名(同伴1名)、旧職員3名、現職員、学生21名、さらに畑山教授の奥様を加えた計56名が集まり、開会した。故松村教授に黙禱を捧げた後、畑山教授の開会の辞とそれに続く前山修士による音頭での乾杯を経て歓談へと移っていった。10年目で初めて行う同門会だけあって話題には事かかなかったのであろうか、非常に盛り上がっていた。話が盛り上がりすぎてあまり料理が消費されずかなり残ってしまったという誤算もあった。会の中盤でM2の近藤君(平18)に研究室の現在の様子、研究の状況等をパワーポイントで紹介してもらった。卒業生、旧職員の皆様に築いていただいた研究室の基盤の

上に立って、今日研究に励んでいる事を伝えたく、企画したものだった。その後、岩淵、江角、畑山各先生からスピーチを頂いた後、卒業生代表として福元(平13)、中野(平14)両博士から畑山教授に記念品の贈呈を行った所でいい時間となり、二次会(手羽屋総本店)へと移っていった。二次会からは村里先輩(平9)にも駆けつけて頂き、正木修士(院平12)による乾杯後、一次会以上の盛り上がりを見せていたと思う。大盛り上がりの中、石原准教授による万歳三唱で二次会を締めた。さらに余力のある方達が集まり、天狗党で三次会を行った。午前3時前まで続いたが盛り上がりは衰える様子は全くなかった。

立案から実に2年がかりの同窓会でありました。全く初めての事だったので至らぬ点多々ありましたが、会の異常ともいえる盛り上がりによってお許し下さい。岩淵先生、三次会までおつきあい頂きありがとうございます。AZADO 大切に使用させていただきます。武田先生、ご参加ありがとうございます。もっとゆっくりお話をお聞きしたかったです。江角先生、随所での御助言ありがとうございました。また学会先でディスカッション宜しくお願いします。鶴本君(平16)、前日のプロセスキミストリーのセミナーありがとう。学生にいい刺激になったと思います。同門会の連絡で手助け頂いた卒業生の皆様、ありがとうございます。皆様のご協力なしにはこの会を開くことはできませんでした。遠方(仙台、富山、東京、関西、徳島等)からを含め、多数のご参加本当にありがとうございます。次回同門会開催の折にも宜しくお願いします。

## 故 松村功啓教授を偲んで

湊 大志郎(平17)

6月3日(日)の学部葬にお越しいただいた皆様にお礼申し上げます。多くの卒業生の方々にもお越しいただき、松村先生はとて喜ばれたことと思われま。

以下の文章は、学部葬にて学生を代表して私が

読ませていただいた弔辞です。弔辞を聞いたこともないために書く作法すらわかりませんでしたので、先生の思い出と感謝をそのまま言葉にし、送らせていただきました。拙い文章そのままではありますが、長葉同窓会報に寄稿させていただきます。



す。

謹んで松村先生にお別れのご挨拶をさせていただきます。

誰よりも元気に階段を一段飛ばしで駆け上がり、テキパキと仕事をこなすような、人一倍精力的な先生でしたので、ご訃報を受けてからひと月以上たっても未だに信じられない思いでいっぱいです。

4月14日土曜日の長崎の朝はとても天気良く、松村先生が療養中でいらっしゃらない中ではありましたが、残りのメンバーで文献会を行うといういつもの土曜日でした。午後になりしばらくして尾野村先生から松村先生が亡くなられたことを教えていただいたのですが、あまりに急に訳が分からずただただ驚くばかりでした。必ず復帰されると信じておりましたし、亡くなるつい二週間前ほどに電話で「もうすぐ戻ってきます」とおっしゃられていたと伺っておりましたので、もうお話しできない、声が聞けないと思うと本当に寂しくて仕方がありません。

いつも先生は用事があると、研究室の入り口のところから、「みなとくーん」という風に学生の名前を呼んで教授室に戻り、僕らが来るのを待たれていました。僕らの知っている先生はおそらく三秒もじっとしてられない程とてもせっかちでいらしたので、作業中でも急いで先生のところに向かわなければというのがとても大変でした。機械の音のうるさい研究室では、出張でいらっしゃらない日だとわかっていても、先生のかん高い声が自分の名前を呼んでいる幻聴が聞こえてきます。亡くなられた後の研究室は、そんな声が聞こえたような気がするたびに寂しさを感じてとてもつら

くなってしまう。

松村先生は、研究者としては皆様ご存知のとおり大変素晴らしい方ですが、我々学生にとっては、お忙しい中でもいつも気に掛けてくださるお優しい人柄がとてうれしく、皆心から慕っておりました。優しい先生のエピソードは沢山ありますが、きっと先生は、「やめてくださいー」と恥ずかしがって怒ると思うのでやめておきます。一緒に行ったキス釣りや研究室旅行でも、学生に負けじとはしゃぐ先生のおちゃめな姿が思い出されます。釣りをすれば誰よりも一番多く釣ろうと一生懸命ですし、旅行で自然の中にある巨木を見に行った時は、一番に木に向かって走り出し、立ち入り禁止の柵を越え、「誰か写真取ってくださいー」とおおはしゃぎしていました。そんな先生の姿は忘れられない思い出です。薬学部長をなさるようになってからお忙しく、去年はほとんど研究室の行事に参加されていませんでした。研究室で一番楽しみにしているのは先生だろうと思うぐらいに残念がられておりましたので、今年はなんとかスケジュールを合わせて行くつもりでした。以前は先生がいらっしゃらなくなるなんてことは全く想像もしていなかったもので、一緒に釣りや旅行に行けない事の方が逆に不思議に思えます。

このように私が先生へのご挨拶をさせていただいておりますが、研究室に配属され指導していただいた期間はたった三年程でしかありません。短い間ですが、とても優秀な学生とはいえない私にとっては、研究に対して厳しく学生を鍛えようとなさる先生のおかげで、以前よりもかなり成長できたと感じています。データをまだかまだかと待つ先生の超強力なプレッシャーに負けそうになったこともありましたが、それも今の自分の力となっております。そんな研究に対しては非常に厳しい面と、普段はとても優しい面をもつ松村先生の下でならと思ひ、今春より博士後期課程に進みました。先生の下でたくさん教えていただいたのですが、今後指導していただけないことが残念でなりません。私自身まだまだ勉強不足なので、教え子として恥ずかしくないよう精進していきたいと思ひます。

最後になりますが、ご遺族の方々も本当にお寂しいことと思われまふ。先生、どうかそちらから

ご遺族の方々のことをお守りくださるようお願いいたします。加えて、研究室の学生や卒業生のことも見守っていただけたらこんなに心強いことはありません。

先生には頼りっぱなしで何も恩返しや感謝の言

葉すら言えていないままです。これまでのお導きに感謝し、安らかに眠られることをお祈りいたします。

松村先生、本当にありがとうございました。

平成19年6月3日 学生代表 湊 大志郎

## ぐびろが丘の清掃活動

徳田 宙久 (平19)

2007年8月5日の日曜日、長崎大学薬学部OBの先生方、現役の院生、学部生により坂本キャンパスにあるぐびろが丘下の慰霊碑の清掃が行われました。この慰霊碑は、長崎大学薬学部の前身である長崎医科大学附属薬学専門部の学生や先生方が防空壕を掘っていた場所にあり、原爆により命を落とされた方々を偲んで建てられたものです。

毎年、8月に行われているこの清掃活動に私は二回生の頃から参加しています。今年は例年よりも雑草の伸びが比較的小さいように感じられましたが、それでも清掃が終わると、汗びっしょりになっていました。その後、田崎先生(昭22)から戦時中、特に原爆投下時前後の話をしていただきました。先生は毎回、このような形で戦争の貴重な体験談を話してくださいます。この場をかりて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

私は正直、本をあまり読まないせいかわ想像力に乏しい人間です。「戦争とは?」と聞かれても、「戦争はよくない、人が死ぬから絶対ダメ」と一般的な答えになってしまいます。それは、戦争→死というもののが具体的にイメージできていないからでしょう。これは、戦争を体験していない人間にとって仕方のないことなのかもしれません。中学校、

高校では歴史の授業で、どの国とどの国が戦争をして、この戦いでは何人死んだということは習ってきているのに、本当に実感しなければならぬ、悲しみ、悔しさ、虚無感は全く得られていません。実際に戦争を体験した人とは雲泥の差です。

私は、縁あって長崎大学に入学し、長崎で6年間住むことになりました。長い薬学部の生活で大切な仲間や先輩後輩に恵まれました。野球部にも所属し、OB、OGの方々が迎ったように、友と喜びや悲しみを分かち合い友情を築き、先輩方に支えられてきました。長い年月をかけ、ゆっくりですがしっかりと人間関係を築いてきました。新入生のころは、卒業された方は遠い存在でしたが、現在は同じ長崎大学を卒業した先輩として身近に感じられます。これは、長崎大学生であったという私のアイデンティティーの確立なのかもしれません。

私にとって、ぐびろが丘の慰霊碑に祭られた人は遠い存在でありました。しかし、彼らは私たちと同じように薬学を志し、必死に生きた功績が私たち薬学部の礎となっていることは言うまでもありません。

人は忘れる生き物です。この清掃は私にとって、



平和な日本において戦争を本当に感じられる数少ない場であるとともに、薬学部を感じられる大切

なものです。来年もまた訪れたいと思います。

## 旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃

伊藤 潔 (昭59)

今年度事業計画の一つの旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃を、平成19年11月18日に長葉同窓会役員6名、事務局1名と今年度より地元諫早支部の支部長に就任された昭和41年卒の平山文俊氏の計8名で実施しました。

当日は、寒くなるとの予報通り、やや冷え込んだ曇り空の下、防寒対策をして集まった6名(諫早在住者2名は現地集合)は3台の車に分乗し10時過ぎに柏葉会館前を出発しました。11時前に現地に到着すると、高良編集幹事がすでに到着していました。間を置かず平山諫早支部長も合流しました。夏の猛暑の影響でもあるのか、記念碑のまわりには雑草が高く繁っていましたが、富永副会長が鎌を手に刈り始め、他も一同軍手をはめ草むしりに取りかかると1時間足らずできれいな姿となりました。いつものように、記念碑もきれいに拭きあげて、清掃を終わりました。

その後、諫早市内で食事をしながら、新諫早支部長の平山氏からは支部活動の難しさや今後の展

望などをお話いただき、今後の日本といった話題にまで発展し、談笑の中、互いの労をねぎらって帰宅の途につきました。

記念碑は諫早市小野町の「干拓の里」の横に建てられています。皆様も、記念碑の近くをお通りの機会がありましたら、是非立ち寄っていただき、先輩諸氏が過ごされた当時を偲んでいただけたらと思います。

参加者は次の通り。伊豫屋偉夫、木下敏夫、富永義則、平山文俊、高良真也、伊藤潔、和田光弘、武次郁子、以上8名。

